
HARUNE

AKIRITA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H A R U N E

【Nコード】

N 2 5 5 3 Y

【作者名】

A K I R I T A

【あらすじ】

高校一年の少年 歩大尉は祖母、葉瑠音と二人暮しだが、その祖母がある組織に狙われ、同級生の実芦と共に事件に巻き込まれていく。きっかけは小さな事件であったが、その裏には人類存亡を揺るがす重大な秘密があった。国家秘密組織バーズはクローン技術によりその危機を回避しようとしていたが、いまだ完全な人クローンを作り出せずにいた。過去のクローン研究所爆発により多くの技術を失っていたからだ。しかしその研究メンバーで爆発事故を逃れた一部の者は、すでに“誕生”の名目で完全体“人”クローンを完成さ

せていた。しかもその精神をすべて管理捜査する知識まで得ることに成功する。その精神管理の重要な鍵を握るのが葉瑠音であるのを突き止めた元研究メンバーの組織は葉瑠音とその周辺人間たちを誘拐してゆく。

葉瑠音たちと、組織、そして国家組織との攻防、さらに所在が不明の歩大尉の両親の意外な存在までが明かされてゆく。

第二回野性時代フロンティア文学賞投稿作品

一部（前書き）

初めての小説です。思うままに書いてみました。
呼んでいただければ幸いです。

今後はこの中の登場人物をこれからいろんな作品で成長させてみようと思っています。

一部

H A R U N E

1 歩大尉ほおい

朝の日差しはカーテンの隙間から入り込むと、部屋の中を明るく照らし出し、一日の始まりを教える。

歩大尉ほおいはそれに答えるように上体を起こし、両手を挙げると背伸びをした。

窓の外からは都会に住み着いた小鳥達のさえずりが目覚めの号令のように駆け回る。

せきたてられるようにベッドから立ち上がり身支度を済ませる。

朝食の準備をするのだ。

キッチンで自分と祖母の葉瑠音はるねの分を用意し昼の弁当も一緒に作る。料理は得意な歩大尉であった。

先に一人で朝食を済ませると弁当と授業道具を鞆に入れる。

葉瑠音はまだ自分の部屋にいる。きっとまだ深い闇の中を瞑想しているのだろう。

「行つてきます」

玄関に向かいながら葉瑠音に声をかける。返事は無いが聞こえてくるはずだ。

今朝は準備に手間取ったせいで遅れ気味だ。

荷物を抱え玄関を出る。

見上げれば外は雲ひとつない快晴だ。

そしてさわやかな風が吹き抜けていった。

急いで坂を降りて行くと、いつもの路地に高校の制服姿が見えてきた。

実芦みろだ。

「おはよう、ボウイ」

小柄だが元気いっぱい手を振って長い黒髪のポニーテールを揺らしている。

幼馴染の女子高生で隣のクラスだ。家も近いのでいつも一緒に通う。そして荷物を手渡す。

「ありがとう」

実芦に渡したのは昼の弁当で、自分の分と一緒に実芦の分も作っておく。

「急ぐよ、出席に遅れない様にならないと。うちのクラスの担任は遅刻にはきびしいからな」

歩大尉が焦る様に言々と実芦は頷いて早足になった。

担任の稲津は几帳面なうえに、ヒステリックな教師で、遅刻にはとにかくうるさい。

自宅から校舎まではたいした距離はないが、その近さゆえに返って甘く見てしまうのだ。

ぼやぼやしているとあつという間に時間切れだ。

校舎に近づくと同じ様に数人の生徒たちが校門を目指している。

そんな生徒たちを追い抜きながら、見た目よりずっと運動神経のいい実芦と、

まるで競争のように校門を走り抜け、一気に校舎内へ、そして昇降口で靴を履きかえると、

「じゃあ、後で」

先頭に行く実芦が二本指を立てて敬礼のようなしぐさをしつつ、振り向きながら言う。

そのまま階段から廊下、そして1 - Bの教室に入って行った。

歩大尉は1 - Aの教室へ、そして自分の席に着地。何とか間に合った。

いつものように稲津が出席を取り終わると一時限目が始まる。教科書を広げ、昨日の予習を思い出してノートを書き出した。

葉瑠音は雨戸を閉めたままの薄暗い部屋の中で集中状態から、精神を開放し一息ついた。

ゆっくりと立ち上がるとドアを開け明るいうりびんぐに出る。

すっかり日が昇り小鳥達の時間は終わり、日常生活の騒音が聞こえ始めていた。

正面の棚には写真があり、満面に笑みの子供が飛び込んでくる。

小学生の歩大尉が夏休みに田舎の親戚の世話になった時のもので、同級生の女の子と並びその周りを数人の大人たちが取り囲むように立ち、

画面いっばいに幸福感を湛えている。

歩大尉は今では高校に通うようになり、その写真からはすっかり大人びて来た。

それに伴って最近はその笑顔の回数が減ってきたと葉瑠音は思った。物心ついた頃にはすでに両親と離れ離れになってしまい、気が付けば無口な年寄りと二人きりでは、

気持ちも沈むであろう。

だからといって特別扱いしないのが、葉瑠音の性分なので、

この年寄りには子供が親に向かって素直に甘えるようなことも、やさしさに対する期待も歩大尉には無いようだった。

キッチンで歩大尉の用意した朝食を食べ終わると、葉瑠音はまた精神統一をするため部屋にこもった。

これはいつもの習慣で、精神を集中し体内のエネルギーの流れを調整することにより、

自然のエネルギーをも自分に取り入れる事が出来るのだ。

葉瑠音が実年齢よりかなり若く見えるのはこのお蔭でもある。

ところが最近、葉瑠音が感知する外的精神の流れが乱れてきている。

過去にも度々、世の中の変化がある時に何らかの揺らぎが生じる事もあったが、

近頃のこの精神エネルギーのぶれは、今までに経験したことのない

乱れ様で、
きつとこれは大きな変化の兆しかもしれない。
大抵のことでは動揺しない葉瑠音であったが、今回ばかりは落ち着いていられそうもなかった。

校内のチャイムが6時限目の授業の終わりを告げると、歩大尉はため息を吐いた。
ふと廊下側をみると教室の後ろの出入り口に実芦が立っていた。
小さくVサインをしている。

歩大尉はすぐに授業道具を鞆に入れると、クラスの友人に別れの挨拶をして、
実芦が待つ出口から廊下に行く。
そしてそのまま校門まで二人で歩き学校正面の道路に出た。

「今日は、どうするの？」
鞆を右手に下げ、歩大尉の方を見上げながら、実芦が話しかける
「シヨッピングモールに行こうか？」
歩大尉が答える。

「じゃあ、いつものコーヒー店ね」
うれしそうに歩きながら実芦が言った。
「コーヒーが好きで、ケーキ系の甘いものや、スパイスの効いた調理パンなども食べる。」
続けて実芦が言う。

「今日は、私がおごってあげるね」
「ああ、ありがとう」
今週はハルの機嫌が悪く、小遣いをもらい損ねていたので、ちょうどよかった。

ハルとは、祖母の葉瑠音のことだ。
学校からそのシヨッピングモールに寄ると自宅に帰るには遠回りになってしまっが、
何時もの事なのでたいした気にはならない。

コーヒー店はショッピングモール内の入り口付近にある。

「何にする？」

店先に着くと実芦が、オーダーの確認をしてきた。

「いつものでいいか」

「では、ボウイはブレンドコーヒー、で私はエスプレッソね、あとそのチーズケーキ2つお願いします」

店員に席の位置を教えて、小さなテーブルを挟んで向かい合わせに椅子に座る。

オーダー番号の札をテーブルの上に置き、その隣に鞆から出したノートを置きながら実芦が話しかける。

「今日は、宿題があるんだ、ちょっと片付けてもいいかな」

実芦は雑音や人ごみがまったく気にならないようで、

いつも勉強や宿題の大半をこういった店のなかでこなしてしまう。

「ああ、かまわないよ 別に特別な話題もないし」

その言葉に頷くとペンを片手に課題のプリントと何時も持ち歩いている参考書とを見比べながら

実芦はノートを書き出した。

しばらくして、店員がコーヒーとケーキを持ってきた。

「おまちどうさま、ご注文の品です、ごゆっくりお召し上がりください」

「ありがとう。ボウイ、食べよ」

歩大尉の分を差し出しながら、実芦が言った。

高校に入学して一ヶ月が経とうとしているが、

幼馴染の実芦とこうして過ごしているのが不思議な感じだ。

違和感がまったく無く、実芦が側に居るだけで落ち着いて居られる。同級生なのに親のように自分の事を見守っていてくれるような気がするのだ。

両親が居ない事が実芦の存在にそんな期待を持ってしまうのか。

それとも実芦自身のあえて何も要求せずただ一緒にいてくれる、

そんな態度が自分にそんな感情を持たせるのか。
実芦がノートにペンを走らせるしぐさを眺めながら歩大尉はそんな
思いに浸っていた。

コーヒーを飲み終えて、ふと実芦の後ろの方を見た。

歩大尉は壁際に座っていたので、外の様子は店のガラス越しによく
見えた。

向かいの路上に大きめのグレーのワンボックスカーが止まり作業員
風の二人が降りてきた。

彼らは辺りを見渡すと、歩大尉たちの居るコーヒー店に入ってきた。
二人とも同じブルーの作業着の上下を着ていた。

一人は大柄で作業着と同じブルーのキャップ帽を長髪の上に深くか
ぶっている。

キャップ帽のつばのせいで、あまり表情はわからない。

もう一人のほうは、帽子はかぶってはいるが、薄茶色のサングラ
スをかけている。

背はキャップ帽の男より少し低く、かなり身体は細いようだ。

彼らは店内のカウンターでオーダーを終えると、入り口近くの席に
座り二人で何かを話し始めた。

店の雑音で内容は聞きとれないが、男たちの雰囲気では真剣な話ら
しい。

「ケーキ食べないの？」

宿題が一通り終わり、ノートを片付けながら、実芦が聞いた。

「あっ、これ食べる？かまわないよ、ほら」

歩大尉が差し出したケーキ皿に、うれしそうに手を伸ばしかけた
が、すぐに腕を組んで、

「でも、やめとく。一度には食べすぎかもね」

残念そうに、ケーキに視線を落とす実芦が気の毒に感じたのか、
逆に歩大尉は急いでその目の毒を一気に食べてしまった。

「あー、美味かった、これでさっぱりした」

あわてて飲み食いする様子を見て、実芦は下を向きながらくすくすしていた。

「何も、そんなに急がなくてもいいのに、口が汚れているよ、ほら」
テーブルに置いてある紙ナプキンで歩大尉に手渡すと、実芦はノートを鞆にしまいながら、

立ち上がって、歩大尉の耳元にささやくと店の奥の化粧室に歩いていった。

渡された紙ナプキンで口元と制服を軽くぬぐいながら、歩大尉は先の作業員風の男たちに視線を向けた。

なにやら言い争っているようで小さなしぐさではあるが、それは尋常ならない雰囲気が見てとれた。

次の瞬間、キャップ帽がテーブルのコーヒーカップを片手で払いのけた。

落ちたカップが割れる音と同時に、キャップ帽はすばやく相手の顎めがけて、

その硬く握られた拳を当てた。

サングラス男はいきなり襲い掛かれて、たまらず椅子ごと後ろに倒れた。

一瞬で店の中は騒然となった。客は全員総立ちになり、入り口近くの者は店の外に出ようと慌て、

残りの客も今まさに男たちを避けて、同じく外に逃げ出そうとしている。

キャップ帽がそのまま倒れたサングラス男に襲いかかるうとするが、サングラス男は横に一回転して身をかわすと、逆にキャップ帽の腹めがけて強烈なキックを見舞わせた。

キャップ帽は後ろの壁まで飛ばされ背中を壁に打ちつけた。

そしてそのまま床に倒れると思われた瞬間、両足でしゃがみこむような姿勢をとり、

素早く身体を伸ばすと勢いよくサングラス男の胸元に頭から飛び込

んだ。

その場に立ち上がっていたサングラス男は避ける間もなく、キャップ帽もろともカウンターの前に落下した。

食器類は一瞬にして床に散乱し彼らの周りに飛び散った。

一連の物音にきづいて、実芦が奥から歩大尉に駆け寄ってきた。

「大変、ボウイ、そのスイッチ押しして、早く」

実芦の指差すほうに、非常ボタンがあった。

迷わず押すと店内には耳を覆いたくなるような警報音が鳴り響いた。

「ちっ！」

キャップ帽が今まさにサングラス男の息の根を止めようと、むなぐらを押さえていた手が、一瞬緩んだ。

辺りを素早く見回しこの警報音のきっかけを作った歩大尉を見つけ睨み付けた。

その目はまるで獲物を狙う猛獣の様に見えた。

その鋭いまなざしに狙われて歩大尉の中に痺れる様な感覚が走ると、身体が硬直し動けなくなった。

「どうしたの、ボウイ！ しっかりして」

気が付くと、実芦が歩大尉の腕をつかんで、激しく揺すっていた。

キャップ帽はカウンターのなかで、苦しんでいるサングラス男の作業着の中をまさぐっていた。

サイレンの音が響き一台のパトカーが向かい側の道路につくと、

開いたドアから二人の警官が素早く降りてきた。

野次馬たちは一瞬にして道を開けると警官はそのまま入り口を目指して駆けて来る。

サイレンと人々の動きに気がついたキャップ帽は、

やおら立ち上がり店の入り口に向かって走り出ようとした。その手には手紙のような紙を握っていた。

しかし一瞬、警官達が早く店に駆け込んできた為、鉢合わせになっってしまった。

キャップ帽は迷わず一人目の警官のあごにすばやく肘鉄をくらわせ、

レジカウンターにはじき飛ばした。

それを見てもう一人の警官が、両手でキャップ帽の身体を押さえつけようとしたが、

キャップ帽は素早くしゃがみ込み、警官の両足めがけて回し蹴りを食らわせた。

警官はたまらず上下反転するかのよう空中を舞うと頭から落下しそのまま動かなくなった。

その様子に店の内外は騒然となっていた。

頼みの警官があつと言つ間に倒されて皆そのすべを失ってしまった。その隙に、キャップ帽は向かいに止めてあつたグレーのワンボック

スカーまで走り、

素早く乗り込むと一気に走り去ってしまった。

警報音はすでに消えている。気がつけば実芦は、カウンターの中央を覗いていた。

「ボウイ、中の人まだ息があるみたい」

いったい何が起こったのか理解できずにいる店員と、

あたふた動き回る客で騒然となっている店の中で、一番冷静に行動しているのが、実芦であった。

「大丈夫ですか？」

歩大尉は声をかけながら、実芦に背中を押されて、サングラス男の倒れているカウンターに入った。

何か言おうとしているのか、立ったままでは聞き取れないのでサングラス男の側にしゃがみ込むと、

いきなり腕をつかまれた。

「こ、これを頼む、誰にも見せないでくれ」

反対の腕で作業ズボンの後ろポケットから出したと思われる書類を歩大尉の手に握らせた。

それは小さく折られていて、手のひらにはいる大きさになっていた。歩大尉はそんなものを受け取りたくなくて押し返そうとした瞬間、

実芦が腕を引いた。

「早く、こつちにきて！」

気がつけば数台のパトカーや救急車が店先の道路に整列している。外では野次馬たちを押しやるように現場確保の警官が数人で店先を囲っている。

カウンターを出ると同時に他の警官が素早く店内に入ってきた。

先頭の警官のあとから、私服警官とおもわれる男がバッチをかざしながら、

「今から現場検証をします。皆さんは指示に従って勝手に動かないよう願います」

私服警官は店内をすばやく見渡すと警官にカウンターのの中の、サングラス男を確保するように命令した。

先に倒された警官二人はすでに救急隊員に付き添われ、救急車で手当てを受けていた。

「君たちは大丈夫かい」

歩大尉とそのかたわらで歩大尉の腕を握ったままの実芦に、目を向けた私服警官が声をかけてきた。

「ええ、大丈夫です、店を荒らしたのは二人組みでした。一人はこの中に倒れている人、

もう一人はグレーのワンボックスカーに乗って逃げました」

真直ぐに私服警官の目を瞬きもせずに見つめながら、実芦は説明した。

「これはしっかりしたお嬢さんだ。話を聞かせてもらってもいいかな」

めちやくちやになった入り口付近を避けて、奥の席に移動した私服警官が、

テーブルを挟んで前の席に座るように指示している。

そして席に着いた二人に一連の騒動の内容を聞き始めた。

「ああ、なんかあせった、あのまま帰れないのかと思ったよ」

明らかに不機嫌になりながら、歩大尉は実芦を見た。

「え？なにが」

家のほうに歩きながら、平然と実芦は答えた。

「なにが、って自分から刑事に向かって話しかけるなんて、いきなりだったからびっくりしたよ」

手に持ったカバンを足元において、両手を広げオーバーなしくさで、

実芦の前に歩大尉は立ちはだかった。

実芦はそんな歩大尉を見ながら、

「ごめんね、でも一番最初に事情聴取を受けたんだから、よかったじゃない。

このまま順番で待っていたら、晩御飯までには帰れなかったよ、きつと」

その通りだった。あの場にいた客と従業員は全て警官に身元の確認と事情聴取を受け、

全員が終わるのを待っていたら後2、3時間は掛かっていただろう。実芦のまったく理になかった行動と物言いにはかなわない。

おまけに言い終わった後には小首なんかかしげて、

「ね、よかつたね」

なんていわれる始末。

「まあ、良かったのか、悪かったのかよく解らないけど、でも大変なことだよな。

あんな騒動に立ち会うなんて。そう思わないかい？」

「そうかなあ」

歩大尉のことなど、構わずと言わんばかりに、軽く脇を抜けてそのまま帰ろうとする実芦だった。

「おい、おい！待って」

早足になった実芦を追うように、歩大尉はカバンを持ち上げながら走って追いついた。

ほんと、妙な所でしたっけかりした振りをするのがまるつきり大人の様

だ。

実芦のそんな態度は知り合った時からあった。こんなときは素直に従うしかなかった。

これが恋人か夫婦ならば、完全に尻に敷かれていた所か、と歩大尉は半分あきらめ気分になっていたが、片や半分はそんな実芦と一緒に居られるのが心地よいのであった。

しばらくいつものペースで帰り道をたどって行くと、

突然、実芦が立ち止まり慌てた様に歩大尉に言い出した。

「あつ、大変！どうしよう」

何のことが解らず歩大尉は驚いた。

「なんなんだよいったい」

実芦は、いま来た道を引き返そうと振り返り、歩大尉を見上げてさらに言う。

「さっきのお店のお金、払ってこなかったよう、どうしよう」

なんだ、そんなことかと思ひ、歩大尉は言った。

「明日払えばいいよ、実芦はあの店の常連じゃなかった？」

意外な返事だと思わんばかりの顔つきで、実芦は見ていた。

「そつかあ、だよねえ」

あつさり納得した実芦は再び帰宅方向に早足で進みだした。

いまいち解らない性格だ、と思ひながら、実芦の後姿を追いつつ、歩大尉は制服から小さく折りたたまれた書類と、刑事の名詞を取り出し、

今日起こった出来事を思い出していた。

そして書類と思われた物は、今見るとそれは中に紙が入っている封筒だった。

「なにしてるの、おいてくぞお！」

実芦が振り返りながら、歩大尉を呼んだ。その足は相変わらずの早足のままで。

2 実芦^{みろ}

いつもの路地で実芦と別れた後、自宅の玄関の戸を開けると、薄暗い部屋の中から声が聞こえた。

「おかえり、歩大尉」

歩大尉の祖母、葉瑠音である。

「ただいま」

返事をする歩大尉はすぐに自分の部屋にいった。

葉瑠音は感覚が鋭く、目で見えるよりも確実に現状を把握できるのだ。そのため、自分以外の誰もいなければ、家の照明はほとんどが消されている。

やがて廊下と台所に明かりが灯り、着替えた歩大尉がそこにいた。

「いま、食事の準備をするから」

リビングには葉瑠音がいた。明かりは窓際のスポットライトのみをつけている。

ただ、かなり小さい灯りのため、部屋の一部がかろうじて見える状態だ。

静かに椅子に座り瞑想をしている様に見える。そして静かに話す。

「解っているよ」

葉瑠音がいつまでも待てるといった感じに、ゆっくりと答えた。

何時からだろうか、歩大尉が食事の一切を作るようになったのは歩大尉を引き取りこの家で生活を始めた頃は葉瑠音が仕方なく炊事をしていた。

葉瑠音にとって料理を作ることは、苦痛以外のなにものでもなかったのである。

歩大尉と二人きりになる以前は、

食事は元より身の回りの細々とした生活の一切はあまり気にすることなど無かった。

一人であれば何もしなくてもどうにかなっていたからだ。

瞑想の間に軽く口に入れられる程度の物さえあればよかった。

葉瑠音自身はそれほど食事らしい物は必要としていなかったが、子供連れになつてはいい加減な食事をする訳にもいかなかった。

歩大尉の健康のために考えたメニューで用意はしたが、

ただ作る物は必要最小限のパターンで後はその繰り返しであった。台所はいつも薄暗く、煮炊きをする炎の明かりのみで調理をしていた。

夕食時などはさながらキャンプファイヤーの様でもあった。

これは、本来の料理の雰囲気からはまったく違う意味ではあるが。でも、なぜか歩大尉は葉瑠音が作る料理には何も文句は言わなかった。

むしろ喜んで食べていたくらいだ。理由はわからないが、このことは確信がある。

何しろ葉瑠音は人の喜怒哀楽を感じ取ることができるのだから。食事の時間が葉瑠音が唯一、人と接する機会であったからなのかもしれない。

一日のほとんどを部屋の中で瞑想する葉瑠音を少ないながらも身近に感じられる時間は、歩大尉にとってはとても楽しみであったに違いないのである。

そんな歩大尉が料理に興味を持ち出したのは、小学校の頃からだろうか。

見様見まねで料理を手伝い、中学に入る頃には一人前の料理人ほどの腕前になった。

こんなに早く上達したのは、歩大尉にとって料理は心躍るものであったためだ。

いろいろな素材との出会い、数々の調味料は、その素材同士のハイモニーを引き出し、

何倍にも変化させる、まさにマジックのようだ。毎日が驚きと喜びの連続だ。

そして幼い頃に葉瑠音と過ごした暖かい時間を忘れない為に料理が出来れば、
自分と葉瑠音が何時までも関わり続けていられるという思いもあったからだろう。

小学校の時に同じクラスに転校してきた実芦が、

歩大尉の自宅に遊びに来る様になったのはちょうど料理に興味をもちだした頃だった。

料理の材料を山ほど抱え近くのスーパーから帰るのを手伝ってくれたり、

歩大尉の自宅で、よく二人で料理を作りあった。

もちろん夕食時には葉瑠音と三人で食事をすることもあった。

実芦は初めてこの家に来たときに葉瑠音とすぐに馴染んでいた。

まるで自分の祖母の様で遠慮などすることも無かったのだ。

めったに人と会うことをしない葉瑠音も実芦とは歩大尉と同じように接している。

これは実芦の持つ何かに葉瑠音が興味を持っているからなのかもしれない。

「ハル、いいよ。ご飯が出来たよ」

歩大尉がキッチンから呼びかけた。

それに答えるようにゆっくりと葉瑠音が席に着く。リビング側の暗いほうだ。

テーブルの上に並ぶ料理はいたってシンプルで、野菜中心だ。

これは葉瑠音自身のレシピによるもので、4、5個の小鉢に盛り付けてはいるが、

いずれも量は少ない。

それに比べ、キッチン側の歩大尉の料理は肉中心でしかも相当のボリュームがある。

育ち盛りで、標準の一人前ではまったく足りない。

さらに今日はコーヒー店での出来事が空腹を倍増させるには十分す

ぎた。

「いただきます」

歩大尉が席に着き軽く挨拶をすると自分の好きな物から食べ始める。

静かに食事をする葉瑠音に比べ、歩大尉は若者らしく口いっぱいにおおぼり、

次から次へと箸を巡らせる。自分でも思った以上に空腹だった様だと歩大尉は思っていた。

量は少なくともゆっくりと食事をする葉瑠音とほぼ同時に歩大尉の食事も終わる。

ひと段落すると、テーブルに置いたウーロン茶の容器から自分の分をコップに注いで、

歩大尉は飲み始めた。

「店でのことは、片付いたのかい」

唐突にまるで、歩大尉の思いを先回りするように、葉瑠音が問いかけた。

「まあね」

飲み終えたコップを置きながら歩大尉は答えた。

そんな話し方をする葉瑠音に歩大尉も今は慣れてしまった。

葉瑠音との会話は伝えようと思う、葉瑠音が答える、それで成立と言った訳だ。

これは葉瑠音の能力によるものであった。

精神エネルギーを受け取ることによりテレパシーのように相手の考えを読むのである。

大事な伝言は思っただけいれれば葉瑠音に伝わる。

その特異な会話方法は歩大尉が物心付いた頃からだったので、普段は何も不思議には思わなかった。

だが学校に通うようになって、葉瑠音以外の人間には通じないと解るまでは相当苦労した。

小学校に入った時にはまったくの無口で居た為、

誰も自分の気持ちを知ってくれないと泣いた事も微かに覚えている。そんな歩大尉を見かねた当時の学校の担任は、自分が感じた事や思ったことは言葉で伝えなければ誰も歩大尉のこととは解って貰えないと、何度とも言われてやっと会話で意思をつたえること、つまり本来の付き合いの基礎を覚えたのだ。

「ありがとう」

葉瑠音のごちそうさまだ。

「また、明日」

歩大尉が答える。食事が、終われば葉瑠音は自分の部屋に入り込む。

なにもなければ、明日のこの時間までお別れだ。

「明日、実芦を連れておいで」

扉を閉める直前の細い隙間から、葉瑠音の声が聞こえ、すぐに扉が閉まる音がした。

今日の事を聞くのだろうか。

実芦はこの家を探ねて来た時によく葉瑠音と二人きりで何かを話している時がある。

歩大尉は思った。

葉瑠音と世代の違いはあるものの女同士ということもあって、そうやって話をしたいだけかも知れないと。

食器を片付け、明日の朝食の準備をし終わると、歩大尉は自分の部屋にいった。

誰もいない部屋の明かりは予備灯を残して、すべて消していった。机の前の椅子に座ると、刑事の名詞と書類が入った封筒を机の上に並べた。

名刺には御手洗健治みたらいけんじと書かれてある。

刑事からは、事件の事で何か思い出したら、この名詞の番号に連絡をくれるようにと言われていた。

でも、この封筒のことはどうしても言えなかった。まだ中身は見えない。
いやな予感がするし、見てしまえば重大な責任を背負われそうで、開く気になれなかった。

再び引き出しの中に名詞と封筒を重ねるようにしまい込むと明日の準備をし、

その後はシャワーを浴びて、不安な気持ちのままベッドに入った。

部屋のドアが、ゆっくりと開いた。ここは郊外の病院の一室だ。
廊下をゆっくり見渡したその男は、周りに人の気配がないのを確かめると、

前がはだけたシャツの中に片腕をいれ、傷む胸をかばいながら、ホールに向かつて廊下を駆けていった。

部屋の中のベッドは、さっきまでその男がいた場所と思われたが今は空になり、

横の床には下着姿の男が、うめき声を上げながら、うずくまっていた。
た。

監視のために付き添っていた警官が、

一瞬の隙をつかれ怪我人の男に襲われ着ていた私服を奪われたのだ。
廊下を小走りに移動しながら、

逃げ出した男はシャツの中からサングラスを取り出すとすばやく顔にかけた。

そのサングラスは私服警官のもので形は多少違うが、

その顔は紛れもなくあのコーヒー店で歩大尉に封筒を手渡した男だった。

男は廊下をホール側に曲がらず、真っ直ぐ行った突き当たりの扉を開け、非常階段に出た。

そしてそのまま地上まで降りると、駐車場の道を横切つて闇に消えた。

それとほぼ同時期に、ホール側から逃げ出した男の居た部屋の方向に、廊下を曲がってくる男がいた。

目的の部屋の辺りを見て扉が開け放たれているのを見ると、その男は一瞬立ち止まり、

その状況に慌てふためいて部屋の中に一気に走りこんだが、ベッドはすでに空だった。

「遅かったか。あいつめ何処に行きやがった」

長髪でがっしりした体の男は病院の白衣を着ていたが、

その格好には似つかわしくもない雰囲気を持っていた。

むしろ作業着が似合うようである。

いや、その男は、先ほど逃げ出したサングラス男を、この病院に送った張本人で、

コーヒー店で争っていたキャップ帽の男だった。

「くそ、なんて奴だ。仕事は出来ないくせに逃げ回ることだけは早い野郎だ」

部屋のベッドを見て悪態をついていると、監視の警官が這いつくばりながら、

男の足にしがみ付いて来た。

「にげられた、通報を、そして手当てを頼む・・・」

搾り出すような声で必死に助けを求めてきた。

「ばかやろう！なんでしつかり監視してないんだ、使えねえ奴だぜ」

キャップ帽はその警官を容赦なく殴りつけた。監視の警官は完全に気を失って動かなくなつた。

その直後、ホール側から数人のかけてくる足音が聞こえてきた。

騒ぎを聞きつけた他の部屋の患者の通報によるものだろう。

キャップ帽は即座に隣の空き部屋のドアを開けると一瞬にして身を隠した。

警備員と医者、それと看護婦二人が部屋に入つて行った。

彼らが部屋の中の状況に気を取られている隙に、

キャップ帽は隠れた部屋から素早く出ると廊下を走り出した。

もうここには用はない。

そう確信したキャップ帽はそのまま突き当たりまで行くと非常階段へのドアを開けて、

駐車場に向って階段を降りていった。

空は曇っているのか月も星も隠れ辺りがすっかり暗くなっている。そのせいで街頭がないところは完全な闇になっている。

そんな町の中を額にうつすらと汗を浮かべながら走る人影があった。時たま明かりのある所を通ると映し出されるその姿は、けっしてジョギングなどをするような格好ではなかった。

胸がはだけて着崩したシャツにサイズが合わないスラックス、薄汚れたデッキシュー姿のサングラス男だった。

走る姿は苦しそうに喘いで足元がふらついている。

病院からどのくらい走っているのか本人にもわからなかったが、ただ、行く先だけは頭の中にはつきりしている。

あの場所へ、そう、あの女の居るあの部屋へ。

時折、車のヘッドライトでうつすらと辺りが明るくなるのを感じると、

その光におびえるように素早く身体を隠した。

今、あいつらに捕まるわけには行かない。どうしても確認したいのだ。

赤いテールランプの筋を残し車が通り過ぎ再び夜の闇が覆いかぶさってくる、

男は身を乗り出す様に走り出すのであった。

やがて繁華街の端の裏通りまで来ると、

昔の土地勘に頼るように路地と路地のつながりを記憶の中でトレースして行く。

そしてそれが正しかったのを証明するようにアパートの前に着くと、ポストの表札を確認した。

「ここだ。やっと着いた」

かつて此処を訪れていた頃より周りの雰囲気がいぶ変わっていたが、その建物はそのままであった。

部屋の前に立ち、チャームを押す。

中からドアに近づくと人の気配を感じた。

「由理、俺だ、早く入れてくれ」

かすれる声を振り絞ってドアの向うに語りかけた。

ドアのノブに手が掛かるのが解ったが、その動きは躊躇しているようだった。

鍵を開けるのを迷っている。

「頼む。一人でやっとここまで来たんだ。他には行くところもない。一晩だけでいい。入れてくれないか」

男はドアにすがりつくように身を預け、サングラスをはずしその扉に顔を付け懇願した。

鍵がはずされ防犯用のドアチェーンも外れる音がした。

男はドアから離れ一歩下がった。そしてサングラスをシャツの胸ポケットに入れる。

ゆっくりとドアが開き部屋の明かりが暗い廊下を照らした。

扉を開けたその人物は女である事は解ったが、後ろの照明によって表情は見えなかった。

だが、たたずまいは男のかつての恋人の由理である事は間違いないかった。

「あなた、どうしたの」

その声はかすかに震えていた。語尾には愛しさがにじんでいた。

「変わらない様でよかった」

部屋に入れるため向きを変えた由理の横顔をちらと見て、

男は言い終わる前に中に入り、素早くドアを閉め鍵をかけた。

その動作は体が覚えていて勝手に動いた。

「いままで何処に居たの、恒。連絡もくれないで」

由理は恒の胸を拳で何度も叩くようなしぐさをし、

すぐにその胸に顔をうずめて恒の背中に両手を回すと持てる限りの

力できつく抱きしめた。

「すまない。お前に迷惑をかけたくなかった」

由理に抱きしめられて恒は怪我の痛みに一瞬顔を歪めたが、由理に会えた気持ちのよさが勝ったのかすぐに安らかな気持ちで答えた。

恒は由理の髪を撫でながらその香りを確かめた。

髪が掛かった頬に顔を寄せると甘い匂いと首筋から漂うかすかな汗を感じ、

今まで張り詰めていた心がほぐれていく。

二人で暮らした日々の思いが波のように押し寄せ、あの頃の熱い気持ちが一瞬よみがえった。

由理は何も言わずそのまま恒を抱きしめていた。そして汗と埃にまみれて恒は疲れきっているのが解った。

「あんだ、食事はしたの」

由理はゆっくりと顔を上げ、恒を見つめると言った。

「いや、なにかあるか」

恒は由理の顔を見つめ返しながら返事をした。

それに頷き由理は恒を部屋の中に誘ってソファに導いた。

「ゆっくりして。いまずぐに食事を用意するから」

ソファに横たわる恒の手を離し、由理はキッチンに向うとすぐに料理を始めた。

恒はその後姿を見ながら安堵のため息を付いた。此処に来てよかった。

あの頃となにも変わっていない。

「由理、ありがとうな」

ソファに仰向けになりながら恒は言った。

「ううん、あんたは此処にきつと帰ってくるかと信じてた。だから待っていたの。」

帰ってきてくれてほんとううれしいよ」

由理は振り向き笑顔で答えた。

恒はその声を聞きながら痛む身体をかばうように楽な姿勢をとった。気がつくともテーブルの上に缶ビールとコップを運んできた由理がいた。

心配そうに見ている。

「怪我をしてるんじゃない。体が痛むの？」

「ああ、少しだけな。でも大丈夫だ。気にするな」

「そう。ならいいけど。喉が渴いているでしょ、これ飲んで待って。」

それと先にシャワーを浴びるなら洗面所に掛かっているタオルを使つて。」

恒はゆっくりと起き上がり、ビールを手に持ちそのまま飲み始めた。気がつけば何も口にせずここまで来ていた。その液体が体中に染み渡り程よい苦味と、

やがてアルコールの微かな火照りが身体を巡った。

由理の部屋はきれいに整理されていた。まったく男の気配を感じさせなかった。

それは、ここに移り住んでから一度も男が居なかった事を物語っていた。

知らず知らずに涙がこぼれた。恒の瞳の中にはキッチンに立つ由理の後姿がにじんでいた。

由理との出会いはどんなことだったか今では思い出せないが、やくざな男に金で縛られて

ているのをかわいそうに思い恒が自らを半ば犠牲の様になり自由にしてやったのだ。

人助けなどのつもりはなかったし、

今までの恒であったならそんな事は絶対にしないだろうと思って生きてきたが、

由理に出会った事が恒の生き方に何かをもたらしたのは事実だ。

とにかく由理を自由にしてやりたかった。それを金で解決しようとする

した。

しかし金を工面するのは並大抵ではなかった。実の所、まとも働いて出来る金額ではなかった。

その男、矢敷やしきから持ちかけられたのは、

近いうちにでかい山があるからその仲間に加わり仕事をすれば女をお前にくれてやる、

と言った事だった。

所詮、いかがわしい奴らのことだから結果はある程度は解っていた。しかし何も出来ない自分に直接、由理の自由を約束すると言われればそれを断ることもないだろう。

最後はすべて自分が責任を負えばすむことだ。

別に由理と一緒になれなくてもよかったのだ。

由理が自由になり自分の人生を取り戻せばそれが恒の本望だと思つた。

そんな折、偶然に恒と由理に二人きりで居られる時間が得られたのだ。

その仕事に来るまで矢敷は由理を自由にしたのだ。

矢敷の本意は恒を仲間に留めて置く為に女をあてがったつもりなのだろう。

矢敷にとって女はただの道具と同じなのであった。

しかし、その仕事の日までの一ヶ月は夢のような日々であった。

由理と恒は心の底からお互いを受け入れた。思えば恒にとっては始めて本気になつて愛した女だった。

そしてその好きな相手から愛されているという感情がひしひしと伝わってくるのだ。

恒にとって由理はそんな態度を何の遠慮もなく見せる女だった。

それは男には最高の女と言える存在だ。

まさに夢中になるとはこのことだろう。あつという間に一ヶ月が過ぎ去った。

仕事の日に矢敷が迎えに来た。それは突然で問答無用だった。

由理に別れも言えずじまいで車に乗せられた。

だが、恒はこんなこともあるだろうと思ひ、自分の荷物の中に由理宛の書置きと現金の全て、

そして自分がいなくなったら違う場所に移るようにと、

秘密に借りたアパートの場所と鍵を用意していた。

仕事は盗みだった。大方予想はしていたがその場所はかなり危険だった。

だが、以外にも矢敷は用意周到だった。

完全な計画でまんまと金は盗み出せたが、

逃げる間に警備員の機転で逃げ道を閉ざされそうになったのだ。

矢敷は恒に犠牲になるように言った。

恒が奴らの盾になり男達を無事に逃げさせたら、

女の自由を保障し出所後も金の心配は要らないと説得しに掛かった。

恒は最初から矢敷達の身代わりになるつもりでいたからなんのためらいもなかった。

ただ矢敷達の約束は信じてはいなかったが。

自ら警察に捕まり、恒は全ての罪をかぶり2年間刑務所で過ごした。

そこで同じ房にいた男と知り合い出所後に仲間にならないかと誘われ、あのグループに入ったのだ。

その後、由理とは連絡は取っていなかった。

自分の行方はあの男たちも追っていると感じたからだ。

「あれからもう4年もたったのね」

由理が恒を見つめながら言った。その手にはビールがわずかに残ったグラスが握られていた。

「誰かいい人はいなかったのか」

恒が聞くが、すぐに恒は何を馬鹿な事を聞いたのかと後悔した。

「もともとあたいは家族もないし、男なんてどれも皆同じ。」

だから見ての通り誰もいないわ。付き合おうと感ずるいい男もいなかったし。」

由理は冗談の様な返事をして笑みをうかべた。

「でも、恒。これだけは信じて。あんたは本当にいい人。あたいは最高の男だよ、

そして愛してる。」

グラスを置くと由理は突然、恒に抱きついてきた。そして恒の首筋に何度も唇を寄せた。

恒もそれに答えるように激しく由理を求めた。愛情の高まるままに。

着替えてタオルを首に掛けた恒がバスルームからシャワーを終えてリビングのソファに座った。

その姿を見ると由理はキッチンの洗い物を終えて、恒の側に寄り添うように座った。

「ねえ、恒。これ、覚えてる？」

由理が見せたのは一通の手紙のように見える紙だった。

二つに折られ中は見えなかったが、恒にはすぐに理解できた。

かつて二人で暮らした部屋から、

男たちと犯罪のために由理に何も告げずに出て行った時に残した書置きであった。

「いまさら何をだすんだ、そんなものを今でも持っていたのか」

恒は由理のその手を軽く払うように言い捨てた。

「うっん、これはあたいの一番の宝物だよ。何度も何度も読み返した。」

最初は涙がこぼれて、なんで出て行ったのかと恨みもしたけど、日々が過ぎると恒の優しさがあふれることに気がついたんだ。だって、そうでしょ。

その気もなければ絶対にこんな事はしないし、

いままで一人は辛かったけど、これに書かれている事は何よりも希望だったよ。何でも我慢できた。

そして、いま恒は此処にいる。あたいは幸せ者だよ。」

恒の目を見ながら由理は本当に幸せな顔を見せた。

「解った。由理、俺はうれしいよ。そこまで愛してくれてるなんて
その言葉を聞いた由理は恒の腕を両手でつかみ二度と離さない、
と言わんばかりに身体を引き寄せた。

「もう、何処にも行かないで。ずっとここにいるんでしょ。ね、お
願いだよ。

「お金の事は心配しないで。あたい、今の仕事でけっこう稼げるんだ。
」
その言葉を聞いた恒の瞳は曇った。

そのわずかなしぐさに由理は一瞬、身体を緊張させたが、すぐに笑
顔で返事をした。

「いいの、こんなのあたいのわがままだよね。
愛してくれてても恒の心はもっと別のものを追いかけていたのは解
つてたはず。

「いまさらこんな事を願っても無理だつて。そうだよね。恒
だまつたまま恒はうつむいていた。

二人の間に沈黙が流れた。
「すまない。どうしても知りたい事が俺にはあるんだ。そのために
どんなことも耐えて来た。

「それだけは捨てるわけに行かないんだ。許してくれ由理」
無言の時を切り裂くように恒は言った。

由理の笑顔は引きつったようにそのまま悲しみに包まれていった。
「解ってるよ」

その言葉は由理自身を言い聞かせていた。
どうにもならない人の感情を何とか理解しようとしていた。
後ろ姿を見せ両手で顔を覆いこぼれ出る涙と悲しみを必死に隠して
いた。

由理の心は壊れる寸前だった。
今までの苦勞が報われたと思つた瞬間、
奈落の底に突き落とされた様で何もかもむなしく感じ始めてもいた。
恒はその由理の態度に自分の心が流されないよう必死に耐えていた。

俺には何よりもこだわる事がある。それを目指さなくてはならない。由理、解ってくれ。それを手に入れなければならぬんだ。俺なんかよりずっといい男がきつと出来る。だからもうこんな俺は忘れてくれ。

恒の心はすでに石になっていた。それは由理の思いもいまや受け入れられる事が出来ないのであった。

その夜はお互いに離れていく心を感じながらも、

二人は最後の別れを惜しむように寄り添いながら眠りに着いた。

眠っていたはずの由理の気配がないのに違和感を感じ目を覚ました恒は、

バスルームからかすかに湯気のおいが漂うのを感じた。

だがその中に何か不快を感じさせるものも混じっているのが解った。恒は飛び起きた。いやな予感がしたのだ。

勢いバスルームの扉を開ける。

「由理、いるのか」

開けながら呼びかけた。その瞬間に恒の目に映ったのは理解しがたい光景だった。

眠るようにバスタブの端に頭を掛けて由理が湯に浸かっていた。

その湯は真つ赤な濁った絵の具の海に見えた。不快に感じたのは血の匂いだったのだ。

「由理、なんてことを」

恒は赤い湯の中に両手を突っ込み、由理のからだを抱える様に抱き上げた。

すぐにバスルームから運び出しベットのの上に横たえた。唇は青く身体は血の気が完全に引いていた。

由理の唇に手を触れ、ゆっくりと胸の心臓の辺りに手のひらを恒は置いた。

あの由理の息遣いが今は消えていた。完全に消え去ってしまった。た。

恒は由理の身体をゆっくりとバスタオルでしずくを拭い取りきれいにしやった。

そして両手首に切り傷がありそこから由理の血液がとめどなく湯の中に流れ出た。たろう事を恒は感じた。

心臓がえぐられるような感情が押し寄せ、今までにない苦しさを思わず首元を両手でかきむしった。

なんでなんだ。俺が由理を追い詰めてしまったのか。

いままで由理は喜んでいてくれるとばかり思っていた。それなのに。

昨日のあの問いかけは由理にとって精一杯の思いだったのか。

此処に来るんじゃないかった。

少なくとも俺がいなければこんなことも起こらなかったはず。

なんて馬鹿なんだ。由理の事はよく知っていたはずなのに。

恒の目から涙がこぼれた。

今はきれいになってバスターoopに身を包んだ由理の身体にとめどなく恒の涙が落ちていた。

由理の眠るような顔を見て今にも目覚めるのではないかと思うと、胸の中から押し寄せる悲しみに耐え切れず恒はひざを落とした。

そしてうずくまると床のカーペットを両手の指で千切れるほどの力で握り締め声を出し泣いた。

恒は由理の部屋をきれいにすると、バスタブにあったナイフを手に取り長い間見つめていた。

由理が最後にその命の終わりを決める為に使った鈍く光るナイフ。そのナイフは今や由理の形見だ、

そしてその輝きが恒に自分の運命を決めるときが来た事をまるで由理自身が語り掛けている様に思えた。

ナイフをズボンの背に隠すようにしまい、由理の部屋を後にした。

二人で暮らした想い出も何もかもそこに置き去りにするように、全てを捨てきつた恒が扉から出て行った。

外に出ると朝の日が徐々に差し始めていた。

昨日と同じ日が何も変わらないように始まっていく。

商店街に差し掛かるとその地域に唯一ある公衆電話から警察に通報した。

アパートの名前、部屋、そして住んでいる女の名前。ベットに横たわり亡くなっている。

電話を切ると、シャツから取り出したサングラスを掛け、痛む胸を押さえつつその場を足早に去っていった。

翌日の放課後、校門を出ると実芦は、

「お店に昨日のお金を払いに行くから先に帰っていいよ。後で寄るね」

と歩大尉に言うと、さつさと店のほうに駆けて行ってしまった。

葉瑠音が用がある旨はその前に伝えていたが。

「なんか、ほっとかかれた感じだな」

歩大尉は、その走り去る姿を見送ると思わずため息をついた。

実芦は時々、目的が見つかると思中になり、それまでは寄り添っていたかと思えば、

次の瞬間にはそっけなくなる時がある。

今回もそのパターンか。

仕方ないので帰りにスーパーによって買い物をしてから帰ることにした。

一方、実芦は修理されてすっかり元通りになったコーヒー店で昨日の飲食代を払うと、

「わざわざありがとございます。これは私どもからの感謝の気持ちです」

と店長から感謝されて、実芦は上機嫌だった。

そして、手渡されたのはセットメニューの無料券だった。

これは、来店の際のポイントカードのスタンプが、満点にならないければ貰えない物だ。

「えー、本当にいいんですか、やったー」

実芦は、この無料券をもらうためにコーヒー店に通っているようなものだったから、

大感激して思わずその場で踊りだしそうだった。

大事そうに、制服のポケットに無料券をしまいながら、

「やっぱり、神様って居るのかなあ。あつ、こんなこと言ったら葉瑠音ばあに叱られるかも」

ぺろつと、舌をだして自分の頭を拳で軽く小突きながら店を出ると、歩大尉の自宅方面に向かった。

コーヒー店からしばらく行くと住宅街に入る。

ここからは坂道を登れば、まもなく歩大尉と葉瑠音ばあの家だ。

もう少しと思いながら早足になる実芦だった。

その後ろ姿を見逃さないように、そして気づかれないようにと、気配を消した男が付かず離れず後を追っていた。

昨夜、病院から抜け出したサングラス男、恒だ。

コーヒー店の中で少年に手渡した封筒を取り返しに、店の近くで張り込んでいたのだ。

少年は来なかったが、そのときの連れの女子高生を見かけたので今まさに尾行しているのだ。

このまま行けば、きっとあの少年に会うはずだ。と確信していた。しかし恒は追い詰められていた。

傷の痛みが何時まで押さえられるか解らないし、あのキャップ帽に発見されることも限らない。

そのすべてが悪い方向に進んでいるようで、逃げ場がなくなっていた。

早くあの封筒を取り返して、目的の場所へ行かなくては。

実芦が歩大尉の家の前からのチャイムを押すと、しばらくして玄関の扉がゆつくりと開いた。

「こんにちは、来たよ」

「思ったより早かったね。コーヒーでも飲んでゆつくりしてくるかと思ったよ」

歩大尉が扉を開きながら、実芦を、招きいれようとした瞬間だった。

「おい！静かにしろ、騒ぐんじゃないぞ」

扉の影からサングラス男が現れ、実芦の首にその腕を回し、即座に自分の前に抱え込むと、片方の手でドアノブに手をかけ、家の中に入りながら後ろ手で扉を閉めた。

歩大尉はとっさのことに、声が出せずにサングラスの男の迫力に押しされ、

そのまま後退りしていた。

男の腕にしがみ付いて、少しでも楽な体制を維持しようともがく実芦だが、

小柄な女子高生の力では、大の男の足元にもその力は及ばなかった。苦しそうに表情は歪んでいたが、その視線は歩大尉に向けられ、私は大丈夫、と言っている様に落ち着いていた。

「おい、おまえだ！あの封筒はどうした？まさか開けたんじゃないだろうな」

サングラスの男は、歩大尉の返事を待てないのか、さらにたたみ掛けるように言い放った。

「とにかく、ここに早く持ってこい！こいつの首を絞めてやるぞ！」
実芦の表情は硬かった、瞳はさらに増した苦しみの為か涙で潤み始めていた。

歩大尉は動けなかった。

目の前で起こっていることは、とてつもない危険なことだ。

実芦を助けたい、その事で頭がいっぱいになり今にも破裂しそうだった。

「おい、早くしろ！」

男のあせりは加速しているようだった。額からとめどなく汗が流れ出し、進入してきた勢いが止まり、何か思い道理にならない自分にも苛ついている。傷が痛み始めたのだ。

「くそー、何てことだ！」

かすれた声で男はつぶやく。

「此処まで来たのに、どうにも成らないのか。」

サングラスで表情があまり見えなかったが、歩大尉に近づくために、

奥の明かりの前進み出た男の表情は、蒼白であるのがはっきりと解った。

辛うじて実芦を抱えているといった状態だった。

そのとき、葉瑠音の部屋の扉が開くと同時に声が聞こえた。

「その子を放してやりな。私たちは、なにもしたりしないから」

かすかな声だが、ゆっくりとその場にいる者たちに、伝わる声だった。

「葉瑠音ばあ、」

実芦はこれで安心できると思い明るい表情にかわって、ささやいた。

男は葉瑠音を見ると、こんな場所に何で？といった表情になり、実芦を絞めていた腕をゆっくり下ろした。

「あ、貴方は?!」

男は完全に実芦を離し、痛む胸を押さえながら葉瑠音にゆっくり近づいていた。

「ボウイ！」

実芦は小さな声で、歩大尉に走り寄ると、その腕にしがみついた。歩大尉は両腕で実芦を抱くようにすると、硬い表情で実芦を見つめた。

そして、ゆっくりと葉瑠音のほうに視線を向ける。

「あの方ですよね？」

サングラスの男は滴る汗を拭うおうともせず、葉瑠音を見ていた。

「なにも喋るな。傷はだいぶひどいようだから、無駄な消耗をしないほうがいい。」

そしておまえの言いたい事はすべて解っているから」

葉瑠音は本当にその男の気持ちのすべてを理解していると思えるような、やさしい目で見つめた。

「それならば俺の目的は達成された。これですべて救われる。」

男は歡喜の表情を浮かべ痛む身体を休めるように、その場にしゃがみ込んだ。

葉瑠音はその男の肩に手をふれてささやいた。

「残念だが、私はお前が思うような立場の人間ではない」

男は、いったい何が、と言った表情で葉瑠音を見た。

「そのような人々も居なければ、集まりもないのだ。お前が考えているような形ではありえないのだよ」

「それは嘘ですよ、俺の記憶が正しければ、貴方です。いや絶対そのはずですよ」

歩大尉にはその二人の会話の意味が理解できなかった。

この男の頼る先が葉瑠音だとしても、そのようなことはまったく感じないからだ。

サングラスの男は、しゃがみ込んだままうめきだした。

もう、傷のいたみに耐えられなくなったようだ。

「ううー、なんとかしてください」

歩大尉がとにかく手当てだけでもと思い、あたりを見渡している
と窓越しに、

一台の車が家の前の道路に静かに乗付けるのが見えた。

そして明かりを消して止まったままだ。

車の中から運転手らしき人物が家の様子を伺っている様だ。

そんな歩大尉の様子を見て、葉瑠音も感じたのか窓の外を確認した。

車のドアが開き中から人影が降りて、こちらに近づこうとしている。葉瑠音はそのタイミングを計っていたかのように、

まだ歩大尉の腕にしがみついて、サングラスの男を不安げに見つめていた実芦に、

ひとときわ鋭く視線を投げた。

その合図とも取れる視線を受けると、実芦は表情を一変させ、強い意思が現れた鋭い顔つきになり、その両手で歩大尉をゆっくり奥へ押しもどすと、

自らは反対の玄関の扉の方に歩き出した。

突然、何をするのかと、歩大尉は実芦を止めようとしたが、葉瑠音の視線を感じてその表情を見ると、そのまま動くなと語っていた。

それに答えるように歩大尉は頷いた。

実芦の動きに気がついたサングラスの男は、痛さにゆがむ表情のまま立ち上がり、

ドアノブに手をかけて外に出ようとする実芦を捕まえようと近づいたが、

すでに実芦は扉をあけて外に身を乗り出していた。

その瞬間男は実芦の腕をつかみ上げ、背中に隠していたナイフを握り、

その手を振りかぶりながら耳元でささやいた。

「この、娘め！」

さらに腕に力が込められ、振り下ろされようとしたその時、鋭い声が響いた。

「おい、やめろ、こっちを見る！」

サングラスの男が振り向くと、拳銃を構えた男がいつでも発砲できる体制で狙いを定めていた。

それは家の前にとめた車から降りてきた男だ。

もうすでに傷の痛みとすべてが思い道理に行かなくなった事で、体力の限界になっていたサングラスの男に冷静な判断をすることは

不可能だった。

「くそ、もうどうでもいい」

実芦を突き刺そうと、サングラスの男のナイフが微かに光ったその瞬間、男の拳銃が炎を發した。

男の脳裏に一瞬のきらめきが走った。

その男、恒の愛した女、由理が目の前に佇んで微笑んでいるのが見えた。

「由理」

声にならない声を發し、

恒は一瞬の夢の中で両手を差し出し由理の手をつかもうと身を乗り出していた。

恒の手を由理は確かに握った。

そのとき光が瞬き由理の身体を覆い始める。

ゆっくりとその身体を振り向きながら後ろ手に恒の手を引き光の彼方に向って飛び込む。

暖かな温もりと由理の微笑と全ての感覚が一体になってゆく。

恒は光の中に解けていく。その一瞬がまるで永遠に続いていたかのように。

発砲音と同時にサングラスの男はその場に崩れ落ちた。

実芦はその場にしゃがみ込み震えていた。

「だいじょうぶか、実芦」

拳銃を撃った男が素早く駆け寄り、サングラスの男の状態を確認する。

すでに息は無く抵抗は無理と判断すると、男は実芦をその場から引き離すように抱きかかえた。

実芦は外に飛び出した時の表情は消え、

今は自分の足元をじっと見つめ起こった事の全てを理解しようとしていた。

「中林さん、大丈夫です。助けてくれてありがとうございます」

顔を上げながら実芦は、すでに冷静を取り戻しゆつくりと答えた。男は中林剛汰といい、葉瑠音とは知り合いで、皆とも顔見知りであった。

元警察官で今は私立探偵をしている。

「よかった。葉瑠音と歩大尉は大丈夫か？」

「うん、大丈夫だと思う」

振り返ると、玄関口に倒れ身体を血に濡らしているサングラスの男を見つめ、

呆然と立ち尽くす歩大尉がそこに居た。

「歩大尉、大丈夫か？葉瑠音はどうだ」

中林の声に我に返った歩大尉が二人を見て答えた。

「はい、大丈夫です、ハルも無事です」

歩大尉は近づいてきた二人を招き入れるようにして、玄関の扉を全開にする。

部屋に入った中林は、葉瑠音を見ると近づきながら頷いた。

そして、無事を確認すると葉瑠音を部屋の奥の椅子に座らせた。

歩大尉は実芦とすでに反対側の椅子に二人並んで座っていたが、

表情は血の気が引き見るからに疲れきっていた。

そんな歩大尉を気遣ってか、実芦はしっかりと肩に手を掛けて庇うように寄り添っている。

その姿は実芦自身に起こった事など、まるでなかったかのように毅然とした態度であった。

しばらくすると外にはサイレンの音が遠くから響いて来て、

数台のパトカーと救急車が騒がしく集まって来た。

最初に到着した車からは警告灯が内部から光り、それは覆面パトカーと解った。

中林の車の前に勢いよく停車すると、中から私服刑事らしき二人が降りて足早に近づいてくる。

刑事達は玄関の前に倒れているサングラスの男を確認した。

そして一人は救急隊員に声をかけ処理するように指示し、もう一人は開いたままの玄関に入ってきて、中を確認した。住人の中に中林を発見すると、声を掛けて来た。

「やはり先輩でしたか、外に先輩の車があったもので。どうしたんですか？こんな所に」

葉瑠音と部屋の奥で、なにやら相談をしていた中林が振り向きながら答える。

「おお、健治、おまえか。まあ、成り行きでな。とりあえず片付けておいたよ」

二人は知り合いのようだ。

刑事は他の連中を家の中に入れまいと、外の制服警官に誰も入れないように指示し、すばやく扉を閉めた。

「この家の住人の事に付いては穩便にたのむぜ」

中林が刑事に歩み寄りながら伝え、そして事件の経緯を説明した。「解っていますよ、先輩。第一、外の男は脱走犯ですからね。」

この家には何の落ち度もないってことになるでしょう。

そして、先輩は事件を解決したヒーローですから」

笑いながら中林に話しかけている刑事をみて、歩大尉は思い出した。

それは、コーヒー店で話を聞かれて名詞を手渡された御手洗刑事だった。

その視線を感じた刑事は、改めて歩大尉と実芦を見て話しかけてきた。

「君たちか、大丈夫かい？」

「はい、大丈夫です」

歩大尉は座ったままで、軽く頭を下げて答える。

隣の実芦も御手洗に視線をむけて挨拶をした。

「君たちが襲われたと言うことは、奴は君たちを探し当て此処に来たのか」

御手洗は二人に確認するかのように言った。

「そうかも知れませんが、実芦を家に入れようとした時に、突然後ろから出て来ましたから」

歩大尉はその瞬間を思い出しながら答えた。

「奴は、よほどの用があったのかもしれない。何か思い当たる事はないかな」

今度は家の中の全員に問いかけるように視線を振り分けながら質問した。

即座に答えたのは葉瑠音であった。

「此処に来た理由ははっきりとは解らんが、私の事を見ると誰か知り合いと思ひ込んで、何かをしきりに伝えたがっていた」

歩大尉に視線を送り軽く首を横に振って、葉瑠音が皆の発言をささげるように答える。

その葉瑠音の行為に何も言うなと感じた歩大尉は発言を抑えた。

「人違いと解るとかなり気落ちしていたようだったし、さらに怪我が痛み出した事と相まって、

自暴自棄になり、助けを求め外に出ようとした実芦に襲い掛かった結果が、

このようになってしまったと言う訳だ」

さらに付け加えるように葉瑠音が話を続けた。

簡潔な物言いの葉瑠音に頷くようにして、御手洗は納得した様だった。

「とりあえずみなさん無事ですのでから、この家のことは先輩に任せます。

あとで、所長のほうから先輩に連絡が行くかもしれませんが、そのときは適当にあしらって置いてください。

報告書はそれなりにまとめて出して置きます。

私たちはその後始末とマスコミの処理をしますので、家の中で休んでいてください」

御手洗が中林に言う。

「ああ、何から何まですまないな」

「なに、大した事ないです。この所轄で事件解決の処理が早くて他の管轄より成績がいいのは、

先輩のお陰ですしそれで私たちもだいぶ助かっていますよ。では皆さん私はこれで失礼します」

玄關のドアを背に姿勢よく立ちながら、皆に軽く会釈をすると中林に敬礼をしてその後、

御手洗は外に出て行った。

しばらくして、外の警官たちも引き上げ、皆が落ち着き始めた頃、
「なんか、おなか空いてない？」

と実芦が言い出した。

「そうだね、じゃ、今からすぐに作るよ」

歩大尉が席を立つと、

「わたしも、手伝うね」

実芦も同時に席から立ち上がり、二人で一緒に台所に向かい食事の準備を始めた。

歩大尉が食材を吟味しながら、中林に声をかけた。

「中林さんも、食べていってください。大丈夫ですよね。」

中林は葉瑠音とテーブルで向かい合わせに座って、小さな声で何かを話していたが、

声をかけられて台所の歩大尉のほうに向きを変えた。

「ああ、久しぶりだから、ご馳走になるよ。なんせ歩大尉の作る料理は天下一品だからな。」

歩大尉はその言葉に照れたのか、うつむき加減に小さな笑顔を見せた。

その横顔をちらりと見た実芦は、振り向きながら中林に話しかけた。

「えー？ じゃあ私のは要らないのね」

「そ、そんなことはないよ。実芦ちゃんの料理も最高だよ」

中林はあわてて手を前に出して、否定のしぐさをしながら、付け加えた。

「ウソですよ、ゆっくりしていつてくださいな」

実芦が小首をかしげて言った。

「いやあ、まいった。実芦ちゃんには、かなわないなあ」

中林はやられたと言う格好で、思わず吹きだした。

そんなやり取りで、部屋の中は、みんなの笑いにあふれていた。

やがて、歩大尉と実芦が4人の食事を運んできて、食器が、次々と並べられていった。

今までのことが、嘘のように楽しい時間が流れていた。

和やかな時の中で、葉瑠音はサングラスの男のもたらした事を思い出していた。

その事はなにやら今以上に、自分の身边が騒がしくなりそうだと感じさせずにはいられなかった。

一部

3、徒具呂とくろ

時間は、少し前にもどる。

サングラス男が警察の監視から服をはぎとり、病院から逃げ出した頃である。

その直後、病院の非常階段を同じように降りて来る男がいた。

コーヒー店でサングラスの男とひと騒動を起こした、キャップ帽である。

サングラス男が收容されている病院を着きとめ、その中の監視されている部屋に、

たどり着いたものの直前で逃げられてしまった。

病院を出ると、グレーのワンボックスカーが駐車している場所に戻り、

胸ポケットから携帯を取り出し、ある場所に連絡を始めた。

二言三言話した後、携帯を切り再び胸ポケットにしまつと、車のエンジンをかけ、

すばやくハンドルを切り返し広い通りに飛び出していった。

道は空いていた。すべては何の問題なくうまく行っていた。少なくとも今までは。

何が悪かったのか、きっかけは何なのか、今日一日を思い出し、これまでのことを振り返ってみる。

きっかけは、あの事だろうか。

このグループに入ってずっと一緒に仕事をしてきた相棒が、突然自分の目的があるので、やめたいと。

何を言い出すのかと理解できなかった。

グループでの仕事は、金銭的にも待遇も問題はないと思っていた。ただ、人に胸を張って誇れるような組織ではなかったのも、中には手が汚れるようなきわどいこともやらされて、やばいこともあった。

けれどもすべてはグループの力でうまく処理してしてくれた。

このグループに入るまでは、およそ世間一般といわれるものに馴染めず、

ことごとく周りの者達と問題を起こしてきた自分であった。

普通に一人の自分ならば、とつくに警察の世話になり、今頃は一生刑務所の中か、

どこかでトラブルに巻き込まれ野たれ死んでいたかもしれない。

そんな者にこうして生きていけるチャンスを与えてくれたのがグループGだった。

そう感じていたのは、相棒も同じとばかり思っていた。

しかし、実際は違っていたのだ。あいつは最初から目的があってグループに入ったらしい。

そのことは、今日あのコーヒー店で聞かされた。

そしてグループの危険な立場も具体的に話していたがキャップ帽にしてみれば、

その事はどうでもよかったし、理解もしたくなかった。

ただ、自分達を必要としているグループを最初から裏切るような真似をしてきて、

拳句に批判めいたことを聞かされたのが許せなかった。

内から湧き出る怒りに任せて、裏切り者に制裁を加えようとしたが、あとで考えると今ここにいるのが不思議なくらいだった。

何しろ勢いでさらに警官を二人も、のってしまったのだから。

きつと今頃は指名手配されていることだろう。

まあ、いい。やってしまった事はいまさらどうしようもない。

それより奴が持っていた封筒をボスに渡せば、事情を理解してくれ

て、
すべてはグループが後処理をしてくれるだろう。

やがて車は、大通りを渡り正面の巨大なビルの地下駐車場の中へ吸い込まれるように入った。

何度もハンドルを切り返ししながら、地下深くへ潜ってゆく。

そして行き止まりに達したとき、車は止まることもせずそのまま正面の壁めがけて突っ込む。

その瞬間、コンクリートの壁とおもわれた部分が消えた。

まさしく、空洞ができたのだ。

そのまま、グレーのワンボックスは中に入ると、空洞は一瞬にして壁に変わってしまった。

もとの行き止まりに姿を変えた。

ワンボックスカーが入った中は、グループGの部外者には決して入れないフロアだった。

キャップ帽は車から降りて、奥のスペースに移動した。

そこは黒い壁に覆われて、床と天井が発光している異様な空間であった。

スペースは奥行きがかなりあるが、奥に行くほど蛇の身体のように曲がりくねっている為、

入り口からは奥はまったく見えない構造になっていた。

中間地点まで行くと、無限むげんと平田へいたがいた。

「すいません、ただいま戻りました」

キャップ帽は二人に深々と頭を下げると指示をまった。

「よし、奥へ行きな、ボスがおまちだぜ」

にやけながら体格のいい無限が顎で奥を指した。

中肉中背の平田はその場にしゃがみながら、身じろぎもせずにキャップ帽を見ていた。

この二人はいつも一緒に行動する。

グループGは常に二人以上で行動するのが決まりになっている。

これは、どんな仕事も確実にこなす為のシステムだ。一人が手一杯になった場合、

対応不可の状態を避けられるし、

とっさの状況判断についても選択の幅が利きよりよい結果をもたらすと思われるからだ。

キャップ帽はこの二人には別に話すこともないので、そのまま通過した。

そして、一番奥のフロアを目指した。

そこは巨大なモニターが設置され、その正面に一段高くなった赤い長方形の台が横長に置いてある。

さらにその前にはソフトクッションのようなものが置かれ、そこに軽く腰を下ろした少女がいた。

赤い台にクッションごと背中を預けた格好で入り口方向を見ているような姿勢だ。

「お帰り、それであんたが言っていた物は見つかったの？」

少女が自分の爪の手入れをしながら、上目使いでキャップ帽をゆっくり見上げた。

高校生ぐらいだろうか、化粧はしているがあとけなさまでは隠しきれていない。

茶色いカールがかかった長髪が肩にかかり、シャープなあごのラインと大きな目は、

その顔の小ささを強調していた。

「ええ、まあ 手には入れてきましたが。」

罰が悪そうに、視線をそらしながらキャップ帽は話し始めた。

「それで、奴には逃げられてしまいました。いま、別ルートで行き先を追ってはいませんが」

話し終わると、少女をゆっくりと見た。

「それは、連絡で解っていたわ、それよりなんであんたが相棒と争う事になったのか、

そこが納得できないわ」

少女は腑に落ちない様子でキャップ帽に話すと、爪の手入れを終え退屈そうにクッションに寝そべってひじを着いた。反対側の腕はまっすぐ身体に乗せて、手には爪やすりを持ったままだ。「奴は、俺たちを裏切っていたのです。それを見逃すわけにはいかなかったから……」

「殴りかかったと言うの！」
少女がブーツで激しく床を蹴り、キャップ帽の語尾を奪い言い放った。

そして身体を起こすと後ろの真つ赤な台から飲み物の空き瓶を手に取り、すばやくキャップ帽のすぐ脇の壁に投げつけた。

キャップ帽は反射的に上体を斜めに反らせて避けると、瓶が飛んでいった壁の方を見た。

瓶は壁に当たると、割れずに音を響かせながら床を転がりやがて止まった。

それと同時に少女が鋭い視線をキャップ帽に向けて言った。

「相棒をどうするかは、こっちが決めるって！なんであんたが勝手に判断するのよ！」

まったく何も解ってないよ。少ない人数で仕事をしているのに、そいつの代わりを探さなきゃならないじゃない。

余計な事をさせないでよ。そして、連絡の仕方もおかしいよ。もっと細かく連絡して。そうしたらいろいろ教えてやれるのに。

このグループに無駄な人間はいないんだし、一度メンバーになったら、

みんな必要なんじゃないの。解ってるでしょ。特にあんたは。

私が最初にメンバーとしてリーダーに押し込んだし、

危ないことを頼んだ後もそれなりに助けてきてやったんじゃない。

なんでなの？ グループの決まりこともいままで何度も話したよね？」

一気に溜まっていた物を吐き出すように喋る。

「もう、ほんとかっかりしたよ」

言い終わると、少女は後ろを向き一息入れた。肩が怒りと失望であえいでいた。

「すいません、でも俺はグループの為をおもって、」

少女の後ろを追いかけるように近づきキャップ帽は言った。

「なに？まだ言うの！」

少女はクッションの側に置いてあった革のバッグつかむと、振り向きざまにキャップ帽に詰めより、

そのバッグを振り上げてその顔面に叩き付けようとした。

しかしその瞬間、細い腕は動きを止められた。

少女は腕をつかまれて思わず振り向くと、いつから居たのか後ろにはスーツ姿の男が立っていた。

「あつ、徒具呂とくろ」

男はこの組織グループGのリーダーである徒具呂だ。

少女が腕の力を抜くと、男は自らの手も離れた。

「まあ待ちなさい、雨豆あめまめ裸。あれだけ言えば満足でしょう。

この人が大事ならもっと冷静に対処したほうがいいですね。それにそんな怖い顔をしていては、せつかくのかわいさも台無しです。」

ぶたれる覚悟をしていたキャップ帽は、呆気にとられた顔をしていたが、

素早く一歩後退すると頭を下げた挨拶をした。

「リーダー、いま戻りました」

スーツ姿の男は軽く頷くと、真っ赤な台に近づきモニターに向かって二人に背を向けて腰を下ろした。

見た目は20代後半、細身で髪の毛は肩までの長髪。

サングラスを掛けいつもタイトなスーツを着ている。

「持ってきたものを見せて下さい」

徒具呂が背中をむけたまま、左手を後ろに伸ばし、指を鳴らした。

キャップ帽はすばやく前へ進み、

徒具呂の差し出した手のひらにサングラスの男から奪い取った封筒を差し出した。

徒具呂はその封筒を受け取り外観を一通り確認すると、中から一枚の折りたたまれた白い紙を取り出し、すぐに広げて書かれている文字を読んだ。

「これはなんですか、冗談のつもりですか」

意外な問いかけに、キャップ帽は答えに詰まった。

徒具呂はその封筒から取り出した白い紙を、側でふてくされている雨豆裸に、

確認させるように差し出した。

雨豆裸は紙の端を指でつまむ様にとると、ひと目見て笑い出した。

「何、これ。冗談のつもり？ もし、真面目にこれを持って来たのなら、とんでもないよ」

紙を持った手を高くかざし、その紙をキャップ帽に見えるようにひらひらさせて、

取れるものならとってみな、と言わんばかりにキャップ帽の周りを歩きまわった。

キャップ帽はそんな雨豆裸の振る舞いに苛立ち、思わず手を差し出した。

その手にすばやく紙をのせて、雨豆裸はさっと徒具呂の横に退いた。「こつ、これは、病院の薬局のレシートだ。

解熱剤、ビタミン剤？何だ、いったいどうなっているんだ！」

紙の内容を見たキャップ帽は、そんなはずはない、絶対おかしい、と言った素振りや紙と徒具呂の方を交互に何度も見ていた。

徒具呂はゆっくりと振り返ると、腕を組みながらキャップ帽に近づき静かに言った。

「なぜ、中身を確認もせずに持ってきたのですか」

深く、言いくるめるように問いただした。

それは、小さな子供に当たり前のことを諭すような口調でもあった。

その言葉に、悔しさを押し殺すように、唇をゆがめて立ち尽くすキヤップ帽は、

「たしかにあいつは、ここに持っている、と言って上着の胸を叩いていたんです。」

とは言ったものの言い訳にしかならないこの状態をなんとか取り繕うとした。

キヤップ帽はコーヒー店のことを思い出していた。

席に着いてグループを抜ける話を始めた奴に、なにか根拠があるのか、と問いただしたときに迷わず、

「それはここに持っている、今ここにある。ただ今すぐには見せられない」

と、奴は言ったのだ。

これは、なにか暗号でもあるのか、それともほかの場所に持っていたのか。

いや、まてよ。あいつ、いつも胸ポケットとズボンの後ろポケットに手をいれて、カードとか、

紙幣を出し入れしていた。

倒れていた時に奴のズボンまではあの短い時間では探せなかったし、思いもつかなかった。

きつとそうだ。キヤップ帽はやるべきことはわかったと決意した。

奴を探すのだ。いや探し出し必ずここにつれてこなければ、俺の立場がなくなってしまう。

「すみません、リーダー！もう一度俺に奴を探させてください。今すぐ行動します」

キヤップ帽は徒具呂に向かい深く頭を下げ、必死の形相で頼み込んだ。

その額は汗で濡れていた。

徒具呂は少し考えるように片手を顎にあて、しばらくそのままにい

た。

すると考えがまとまったのか、その手を下げ、ゆっくり口を開いた。「いいでしょう、今、奴に外をうるつかれても困ります。計画は着実にうまくいっているし、そして、完成しつつある。」

そんな時期に裏切り行為をした者をこのままふらつかせておく訳には行かないでしょう。」

もう一度、機会をあげましょう。」

ただし、この雨豆裸とその二人をバックアップに連れて行きなさい。」

絶対に奴とその身につけた情報を手に入れてくるのです。」

徒具呂が近づきながら、キャップ帽に言いつける

「そして今の車にはしばらく乗らないように。もう手配が回っているはずですからね。」

違う車で出かけてください。」

付け加えるように徒具呂が話し終わると、雨豆裸と無限、平田に顎で合図した。

雨豆裸はキャップ帽に近づいて、ため息をついた。

「あんた、今度は最後だよ。もう二度と失敗はできないと思ってね。」

その顔を覗き込むようにしながら言い終わると、

すぐに徒具呂に向き直り足元にあったバッグを取り上げた。

肩に背負うようにして一呼吸してから、もう一度向き直り出口側に居る二人に声をかけた。

「無限、平田、さあ出発だよ。車を用意して。」

その呼びかけに答えるように、二人は軽く返事をしてすぐ外に出ていった。

さらにその後を急ぎ足でキャップ帽が追いかけて行く。

雨豆裸はゆっくりと確実な足取りで、徒具呂に軽く目配せをしながら頷き、

指を鳴らすと軽く口笛を吹きながら出口に消えていった。

日が昇り始め、街は白々と姿を現し始めた。

まだ静かな路上をゆっくりと走る2台の車がいた。

一台は、グレーのセダン、そしてもう一台は、

その後を突かず離れず一定の間隔を守りながら走る黒いセダンだ。

グレーのセダンには、キャップ帽が運転席に座り、あたりを見渡しながら運転している。

その横で助手席に座りひざの上にはノートパソコンでなにやら検索している雨豆裸がいた。

いい結果が出そうもないと確認すると、キャップ帽に視線を向け話しかけた。

「なにか、ほかに情報はないの。あいつどこに隠れてるの。」

どこにも足跡が見つからないし飲食店、カフェ、ビジネスホテル、そのほか隠れられそうな場所でもグループの情報検索にまったくかからないし。

いままでの行動範囲で心当たりはすべて回ったのに。ねえ、そうだよね」

「まったくです。今まで奴が回りそうなところは、すべて確認しましたし、

外部から当たれるところは検索範囲ですべてのはずですが」

キャップ帽が必死に周りを見ながら答えた。

そしてハンドルをその両手で強くたたきつけた。

「きつと何も無い場所ですと隠れているのかも知れませんが」

そうなつてくると奴が動き出すまでこっちは手が出せません」

キャップ帽は軽く雨豆裸に視線をむけて指示を仰ぐように言った。「仕方ない。今日のところはおとなしく引き下がるしかないか。しかしむかつく。」

そんなに必死に守るものならなおさら奪いたくなってきた。

いまに見てなよ、絶対につかまえてやる。」

ノートパソコンをダッシュボードにしまつと、携帯をだして話し出した。

「平田、今日はお開き！戻るよ」

後ろの車から、ヘッドライトの点滅をサイドミラーで確認すると、キャップ帽にGのフロアに戻るように言った。

三部

4、雨豆裸アメ豆裸

どこに行方をくりましたのか、サングラスの男は見つからずにはい

た。昨夜から今朝方まで雨豆裸と無限、平田の4人、2台の車で知る限り、

グループの情報範囲を探し回ったが、まったくの不発に終わった。皆、いらつき、あせり、などを伴い険悪な時間が過ぎたが、どうしようもないと観念すると、ひとまず帰ることにした。

グループのフロアにもどり、徒具呂に状況報告して、3人と別れたキャップ帽はひとりねぐらに戻るためにビルから通りに出た。

近所の飲食店で食事をしながらも、探しもれたところはないかと、そのことが頭からはなれずにいたが、部屋に戻り、横になると疲れのせいかそのまま眠りについていた。

グレーのセダンが地下駐車場から出る。

通りに出て走り去る運転席の窓にはキャップ帽の横顔が見えた。

再び夜の夕闇が訪れる頃、もう一度サングラスの男を追い求めて出かけていく。

今夜こそは何か手がかりがあるはず。いや、必ず見つけださなければ。

その思いだけでキャップ帽は車を走らせる。

新しい居所がわかるわけでもない。完全に行き詰まりだ。

だが、使命感だけで動くには十分だ。今のキャップ帽にはそれしかなかった。

もう一度何もかも空にして、あのコーヒー店から探すことにした。グレーのセダンが、コーヒー店近くに来たとき、

対向車線を赤く点滅したライトの集団が近づいてきた。

予感がしたのか、グレーのセダンをすばやく路地にいれ、ライトを消して様子を伺った。

救急車とパトカーが集団で同じ方向に走り去った。

これはなにか事件だな。キャップ帽は直感した。

一息つくくと、エンジンを掛け、その方向をなぞるように、セダンは走りだした。

パトカーの光の後を遠目に追いかけてゆくと、住宅街の坂の上のほうに人だかりが出来ていた。

救急以外の車も着ていた。マスコミ関係だろう。

その喧騒を避けて、キャップ帽は少し離れた目立たないところに車を止めた。

車を降り野次馬にまぎれて、事件の現場と思われる家が見えるところまで来た。

ちょうど、被害者が担架に乗せられて玄関口から救急車に運び込まれてくるところだった。

その人物は男だ。担架が近づいて横を向いたとき、男の顔が振動でこちらに向いた。

完全に息をしていないのが解り、絶命しているのは明確だった。

そしてその男はキャップ帽の捜しているサングラス男であるのもはつきりと解った。

何があったのか、キャップ帽は思いをめぐらした。

しかしどう考えてもここに奴がきて、何らかの形で死にまで至らしめる事情が解らない。

やっと奴を探し当てたが、これだけの人だかりでは手が出せない。

まして近づくなど無理だ。

ただひとつ確かなのは、奴の口からグループの秘密は漏れなくなつた。

その点ではいいことだ。あと残された事は奴が持っていると思われる書類だ。

何とかその死体に近づき、探してだすことだ。

しかし警察のことだからもう奴の持ち物はすべて持ち去られているだろう。

そうだ、そうに違いない。

ここはうかつに奴の身体に近づこうものなら、捕まえられてしまう。奴のことはあきらめよう。

それよりなぜここで命を失う羽目になったのか答えの一部でもいいから見つけられるまで、

近くで様子を伺うことにした。

事件処理の警官達も調査を終え、引き上げにかかると、

それに合わせてマスコミ連中も潮が引くように事件現場から立ち去っていく。

後には熱心な野次馬が数人いたが、彼らももう何も新しい展開がないことを確認すると、

それぞれの家に消えていった。

いつもの静かな住宅街に戻った道路に、グレーのセダンが止まっていた。

中にはキャップ帽の男が背を低くして、事件現場となった家の様子をじっと伺っていたが、

外からでは何も中のことはうかがい知る事は出来ないでいた。

待つこと数時間、玄関のドアが開き男と少女が会話をしながら出てきた。

中林と実芦だ。

「では、ごちそうさま。俺の車で実芦を送ったらそのまま帰るので」

中林が中にむかつて挨拶をすると、実芦も一緒に中の少年に手を振りながら挨拶をする。

「じゃあ、明日ね 歩大尉」

「ああ、また明日」

歩大尉が答える。ドアを手で支えながら玄関口に見送りに出てきた。

そのとき、向かいの道路沿いの木の陰に止められたグレーの車の男の目が光った。

あれは、たしかコーヒー店にいた少年、そして男と一緒に車に乗り込もうとしているのは、

そのとき少年と一緒にいた少女ではないか。

なにか事の次第の一片が見えたような気がした。

そうか、細かい事情はわからないが、

この少年達に会いにきて自ら事件を招いてしまったのかも知れぬ。奴のことだからうまく行かなくてしくじったのだ。

となれば、この少年、もしくは少女が奴の死に至らしめた理由と、例のことを記した書類等のありかを知っているかもしれない。

なんとしても聞き出さねば。

キャップ帽の男はふつふつと湧き出る強い意思に意外なほど心地よい物を感じた。

もう、迷うことはないのだ。

目的が決まったキャップ帽の男は車の中でじっと彼らを見つめていた。

中林の車は、マンションの前に止まる。

住宅街からは少し離れた広めの公園の並びに建つ比較的高層の四角い建物だ。

公園の木々と同じ種類の立ち木を敷地内にも取り込み、

淡い色を基調とした外装タイル、そして積極的に緑を取り入れたエントランスと、

その全てが景観調和を演出した静かな雰囲気をかもし出している建物だ

その正面に止まった車から実芦が降りて、中林に声をかける。

「今日は、本当にありがとうございます。またよかつたらお食事をご馳走させてくださいね」

にこやかな挨拶を送ると、車の中林は頷いた。

「まあ、無事でよかつたよ。近頃はどこも物騒になつちまつた。本当に困つたものだ。」

実芦も気をつけてな。じゃあお休み」

中林が軽く手を上げると、実芦は車のドアを閉めた。

再度、中林にウインドウ越しに挨拶すると、すぐに振り向きエントランス向つて行つた。

中林は実芦がマンション内に入るのを確認するとハンドルを握りなおし、

軽くあたりを見渡すとすばやく発進させ自宅のある方向に向つて走り去つていった。

その姿を照明を消した車から、

二人がそれぞれに立ち去るのを確認するキャップ帽の姿があつた。

そして、ヘッドライトが光る。

グレーのセダンはその場を中林の車と反対方向に走り去つた。

キャップ帽は勝利を得たように笑つていた。

これで、それぞれの場所がわかつたと言わんばかりの気配を漂わせながら。

グループのフロアに戻ると、雨豆裸がクッションに座りながら、ノートパソコンを操作していた。

戻つてきたキャップ帽を見ると即座に口を開いた。

「あいつ、死んでたみたい。道理で見つからないはず」

素早くノートパソコンの画面をキャップ帽に見せた。

そこにはグループの情報一覧があり、

その中のウインドウがサングラスの男の死を知らせていた。数枚の現場写真も載っている。

地面に血のりを広げその中で折れ曲がった木の枝のように、生気を失ったサングラスの男が倒れている写真だ。

「あいつを撃つたのは、現場近くに居合わせた警察関係者みたい。これはかなりの腕で抵抗する暇もなかったようね。一発でしとめられている」

雨豆裸がおよそ少女とは思えぬ観察力で現場写真の分析をして説明する。

どのくらいそんな状況を経験しているのか、と思うとキャップ帽は背筋が寒くなった。

確かにこの雨豆裸の物腰は人を威圧する迫力がある。

この威圧感やはり修羅場を潜り抜けた物のみが有するものなのであろう。

そう思うとますます逆らえぬと思うのだ。

「実はそこに、今まで居ました。警察達が現場に向かうところを偶然通りかかったので、

後を追うとその場所でした」

「えっ、それで、なにか収穫はあった？」

雨豆裸が身を乗り出して、これは気が利くじゃないかといったしぐさで話す。

「ええ、事件現場で、その警察関係の者と思われる男と、

例の書類のことを知るガキどもを見つけました。

そして居場所も確認してきました」

「よし、じゃあやることは解ってるわね。いつもの手順でやるから」

雨豆裸はノートパソコンを真つ赤な台に置くと、無限と平田を呼び出し、

3人にこれからのことを話し始めた。

次の日の午後である。

学校が終わり何時ものように歩大尉と実芦が自宅に向って歩いていく。

歩きながら話を交わす二人の話題はお互いのクラスでの出来事や、同級生が話題にしたテレビのドラマやバラエティのことなどであった。

普段の通学路の行き帰りは話などあまりしなくてもそれなりに時間が過ぎていたが、

昨日までの出来事が二人の関係に違和感を生じさせてお互い黙っていられたかった。

自然と肝心の話題から避けようとしている。

このまま時が過ぎて忘れてしまえばいいと感じていたし、

この違和感も時が解決してくれると思うのは二人とも同じであった。そしていつもの角まで来ると、実芦は歩大尉に別れの挨拶をする。

「又、明日ね」

「じゃあ」

実芦に軽く手を振り歩大尉は坂の方へ歩いてゆく。

実芦も同じように手を振ると背を向けてマンションに向かう。

今日の二人は何か味気ない感否めなかったが、

しばらくは仕方ないかなと実芦は考えていた。

でも一人になるとまったく別の思いが湧いて来た。

学校ではそろそろ中間の試験が近づいている。

最初の試験なので少し心配だそして高校に入るといろいろと忙しいことがある。

今日は担任から部活動に入る様に進められた。

将来進学等に有利になるので、放課後に用事がなければ入っていたほうがいいそうだ。

別に何も興味がないので、今まで気に掛けていなかったが、

いざどれかを選択しなければならいとなると迷うばかりで決まらない。

友達がいればそれに続いて入る手もあるが、正直仲のいい友人はい

ない。

そうだ歩大尉が部活に入ればそれと同じにしよう。

明日、歩大尉に聞いてみよう、

などと思いつながらその歩みは何時しかマンションのエントランスに近づいていた。

ふと気がつくともマンション入り口の道路の前に、

なにやら車が一台エンジンを掛けたまま停車している。

窓にはスモークの黒いフィルムが張られているようで、中の様子は見えない。

何かいやな予感がして、すぐにそこを通りすぎようとした時、

いきなり後ろから身体を抱きかかえられ、口元をガーゼの様な物で覆われた。

身体を離すため、その腕を払おうとしたが、身体が利かず、次第に目の前が暗くなり力が抜けていく。

口元を薬品のついた布で押さえられて呼吸ができない。

実芦はもう自分の力では動けなくなっていた。

鞆を持つ手が力なく下がると道路に鞆が落ちた。

実芦は完全に意識を失った。

「ここに早く！」

車のドアが開き、少女がすばやく出て、後部のトランクを開けた。雨豆裸である。

実芦を抱きかかえて男が足早にそのトランクに連れて行く。

雨豆裸は実芦の落とした鞆をすばやく拾い上げる

「手足を縛ったら、頭に袋をかぶせて。くれぐれも息ができるように、死なれてはまずいから」

雨豆裸の言葉にうなづく男は、あのキャップ帽である。

言われた通りに、実芦の手足を白い拘束テープで縛ると、黒い目隠し代わりの布袋を頭からかぶせた。

首周りに十分余裕があるのを確認すると、トランクを閉めにかかる。この車は通常の車と大きな違いがある。それはトランクルームの中

だ。

一般的な車両は荷物スペースを確保する為に内装は、薄いフェルト地で荷物が車両の鉄板に直に当たらないようにしているだけなのに対して、

これはかなり厚い衝撃吸収素材で覆われて中はかなり狭い。とは行っても大人ひとりには十分横になれるようになっていて、

いや、車に詳しい者でなくても人間が中に入る事に気づくのは用意である。

つまりこの車は誰かをトランクに乗せて運ぶために作った車と言えるだろう。

実芦を横にして寝かせてトランクを閉めると、

キャップ帽はあたりを見渡し人の気配がないことを確認して運転席に乗り込む。

助手席には雨豆裸が座り化粧を直していた。実芦の鞆は後部座席に置かれている。

「さあ、戻るよ」

キャップ帽に指示すると、車はそのまま走り去って行った。

実芦と別れた歩大尉は自宅に帰り自分の部屋に入ると、

机の引き出しからサングラスの男が持っていた封筒を取り出して、机の上において何かを考えている。

これはいったいどんなことが書いてあるのだろうか。

あの男が必死になってこれに拘っていた事が今だに頭の中をめぐっている。

結局、警察に出すことも出来ないでいたし、誰に相談出来る訳でもない。

こんな時に話せるのは、ハルしかないか。

と考えているその時、ドアがノックされた。

「はい」

「歩大尉、あけるよ」

葉瑠音が静かに部屋に入ってきた。

「実芦が行方不明になった。中林に連絡してくれないか」

「えっ、どうしたの？何処かに行ったのかい？」

「いや、解らない。ただしこれは普通じゃない。実芦の存在が感じられない」

歩大尉は部屋を出るとあわててリビングの電話で中林を呼び出した。

葉瑠音はリビングの椅子に静かに座る。

中林に話をする、

今からそこに向かうとの返事でしたらしくそのまま待っていてくれと言った。

いったいどうしたと言うんだ。

次から次に何かに巻き込まれたように事件が起こるなんて。

しかも、今度は実芦が行方不明とは。

歩大尉は動揺する気持ちを抑えきれず、葉瑠音の横に座ると話し出した。

「ハル、どういうこと？実芦の存在が感じられないって」

「いや、大丈夫だと思いが突然、実芦の精神波が遮断された。

これはなにか特殊な物体で包みこまれたような感じで、こんなことは普段であればほとんどない。

きつと何か特別な状況になっているはず。」

「どうしたらいいんだろう。」

「やっぱりこれは中林さんに相談するしかないみたいだけど」

歩大尉の言葉に葉瑠音がうなずいた。

中林が到着するまでまだかかりそうだった。

歩大尉は自分の部屋にもどり、気になっていた封筒を手を持って葉瑠音のまえに来た。

「ハル、これは昨日の男が持っていたものでどうしたらいい？」
差し出された封筒をみて、葉瑠音はゆっくりと言った。

「それは、しばらくお前が持っているがいい。さして気にするほどのことではない。

ただし、欲しがる者達には非常に重要なことが書かれている。歩大尉、これを見たとしても今のお前には意味はないだろう。今まで通り机の中にしまつて置くがいいだろう」

「もう、中に何が書かれているか見た？」

「いや、昨日きた男が私に向けた“思い”の中にその書類を書いているところを感じた。

そしてその文字もはつきりと私には手にとるように解った」

葉瑠音の言葉にうなずくと、

部屋に行き歩大尉は封筒をまた机の引き出しにしまい込んだ。

台所からお茶をいれて葉瑠音にわたして、歩大尉もコーヒーをいれた。

実芦が行方不明とのことは何か、

今までの男たちの関係ではないのかと思いつめていた。

あの封筒がすべての原因ではないのか。

歩大尉が自分の思いにふけていると、葉瑠音が言った。

「歩大尉、今はまだ状況がわかっていない。余計なことを考えない方がいい」

はつとして、振り返るとそこには葉瑠音のやさしいしぐさでお茶をのむ姿があった。

もうすべて歩大尉の思いは解ったからと言う態度であった。

いつものように葉瑠音のその存在を感じると歩大尉は落ち着いてきた。

そうだ、悪いことは考えずにこれからの事実だけに目を向けようと思つた。

そのとき、ドアがノックされ外から声が聞こえる。

「中林です」

ドアに近寄り、返事をしながら扉を開けるとすばやく中林が家の中に入る。

「実芦が行方不明だって。昨日は無事に帰ったはずだが」
葉瑠音に話しかける中林は冷静な感じだった。

「いや、ほんの前のことだ。突然消えたようなのだ」

ゆっくりと、中林に答える葉瑠音。

「不明になった最期の場所は解るか？実芦のマンション前か」

「そうだ、そこでなにかに捕らわれるように実芦の精神波がみだれ、直後に遮断された。

精神波の乱れは何らかの形で実芦の意識が失われたことを意味している。

ただその精神波が遮断されたことは今の状況ではまったくの不明だ。でも最後の精神波は生気を感じさせていた。

実芦は眠らされたまま連れ去られたと思うのが妥当だ」

葉瑠音の話を聞くうちに、これは只ならぬ者たちの仕業であると中林は確信した。

四部

5、中林

中林は以前、警察で刑事をしていた。

主に行方不明、失踪、誘拐そして殺人事件等の凶悪犯罪の特捜部の一員であった。

警察時代ではその中で何度か解決に導いたものもあるが、失踪事件の中には事件が特殊で手がかりすら発見できずに、時間だけが過ぎて失踪者が危険に追い込まれてしまうものも多々ある。

これは、警察権限等の制約により捜査が行き詰まり、事件は最悪の結果を迎えるのだ。

中林はそんな警察に限界を感じ自ら退職を願い出て、独自に失踪者、誘拐事件を解決すべく私立探偵をするようになった。ただしこれには非公式の権限を与えられているのだが。

警察時代に担当した事件がきっかけで、葉瑠音と出会うことがあり、そのときの事件解決に葉瑠音の能力が多分に貢献したのだ。

このことは表ざたにされたくない葉瑠音自身の頼みもあり、最終的に事件の解決をしたのは中林の地道な捜査による物とされていた。

そんな経歴を評価されて、中林は警察上層部より声が掛けられる事になった。

詳細はこうだ。

ある時、国家レベルの要人の家族が誘拐されるといふ事件が起きた。当然、警察の持てる力を使い全力で捜査をするも、犯人も家族の行方もまったく手がかりがつかめないまま時間が経つ

ていった。

そこで特別プロジェクトが緊急に組織された。その中の一人に中林が抜擢された。

中林はその特別プロジェクトに入る条件にメンバーは個々に活動できること。

表向きは私立探偵、

もしくは私設警察としてどここの組織にも属さない単独警察官であることこの条件を出した。

さらに捜査に関する情報の出所は一切探索しないとこの条件も要求した。

すべては結果次第との事であったが、

上層部が最後の頼みの綱である彼らの条件を飲まない訳はなかった。これが中林が非公式として与えられた権限である。

要人の家族の誘拐事件については、

中林は事件担当直後から葉瑠音に失踪者の探査依頼をしていたため、即座に被害者の居場所を確認できた。

どのような場合でもその情報源は探索されないの、

堂々と中林はほかのメンバーと共にその要人の家族を救い出すことに成功し、

当然その犯人も確保できたのだった。

この功績により中林はプロジェクトの継続活動とリーダーの権限を得た。

このことは葉瑠音もすべて承知していた。

中林の行方不明者を探し出して救いたいという純粋な気持ちに賛同し、

今では積極的に協力をしている。

そして中林の協力はスタッフの維持経費が葉瑠音たちの経済的支援となっているのだ。

しかし、今回は最初から葉瑠音の能力を超えた困難が待ち受けて

いた。

実芦の失踪はその直前までの存在は確認できたがその後の足取りの一切が消えているのだ。

葉瑠音が感じ取れる精神波を妨害するものにより探査行動が無力化されている。

でも中林の捜査にはこのような場合も当然想定されている。

人知を超える能力が使えなくなった場合は、地道に手がかりを追い少しでも誘拐犯に近づくのが基本だ。

中林はまず実芦が連れ去られたと思われるマンション前から捜査を始めた。

エントランスにはさほど変わった様子はなかった。

車を止めしばらくそこに留まることにした。

何人かの行きかう人々が居たが、どれも別にとりだて変わったところは見受けられなかったが、

実芦が失踪したと思われる時間に、マンション前をゆっくりペットの犬と散歩をしてくる男性が目についた。

中林は直感した。

車を降りてその男性に挨拶をすると話しかけた。

「いつも、このあたりを散歩なさっているのでしょうか？」

「はい、いつもこの時間ですね。意外とこの時間は人通りも少なめのんびり出来るので」

「それでは、昨日もこの界隈を散歩なさっていましたか？」

「ええ、そうですね。そうだ昨日は珍しく車が止まっていましたね、このあたりに」

中林は自分の直感が正しかったことを確信した。

男性から特徴を聞き出し、再度挨拶をすると自分の車に乗り込み、運転席の車載コンピューターにその車の特徴を入力した。

すると最近特徴的な失踪事件に関する情報の中に条件に当てはまる車両があった。

その事件は、いずれの被害者も失踪してから二、三日で自宅に戻る
といったもので、

しかも無傷で返っている。

中には失踪していたが家族が被害届けを出さずに終わっているのも
あるとのことだ。

なぜそんなものまで報告されているかというと、

どの被害者もその失踪した日からの記憶が一切ないのだ。

どこで連れ去られどこに居たのか一切覚えていないらしい。

持ち物も一切奪われていないし、その間に携帯電話や、

現金カード類も使用された形跡もない。

携帯電話が失踪直後に電源を切られていた以外は。

その車は、被害者たちが最後に目撃された場所にいずれもいた形跡
があった。

正面にはナンバーが取り付けられず後部ナンバーだけのはずだが、
どの目撃も車両の後部を扉や壁に向けられて止まっていた様だ。

この手の被害者が無傷でしかも周辺の家族や友人にさほど被害がな
い場合、

通常では中林の管轄外になる。

しかし、今回は特別だ。

いつも捜査協力してくれている葉瑠音の頼みでもあるし、

ましてあの実芦が失踪、

いやもう誘拐であるのは確実だ。

そしてこの事件の真相は何か深いものがきつとある、と中林は感じ
始めた。

ともかく、目撃証言によるグレーのセダンの足取りを追うことにし
た。

Gのフロアを先頭きって雨豆裸が歩いて行く。

手にはそのファッションには似つかわしくない通学用の鞆を下げて

いた。

その後ろに少女を抱えたキャップ帽の男が付いて歩く。

少女はまだ黒い袋をかぶされたままで、意識はないようだ。

フロアを一番奥まで行くと徒具呂が壁に沿って立っ立ってその片手が壁を撫ぜる様に上下すると、

壁の一部が開いた。

開いたというよりは四角い空間が空いたと言う様であり徒具呂はまるで二人を招き入れるように、

手を進行方向に差し出した。

雨豆裸とキャップ帽は慣れた風に、静かに奥に入っ入っ入った。

入り口の空間は3人が中に入ると元の壁に戻っていた。

部屋は計測機とそれぞれにモニターが接続されている機材が壁一面に並べられて、

中央に寝台が用意されていた。

その寝台を取り囲むように各種のカメラとセンサーが大量に設置されている。

キャップ帽はその寝台に少女を寝かせ静かに頭から布袋を取った。

実芦の顔が静かな眠りを漂わしている。身体は制服のままだ。

靴は脱がされ寝台の床におかれ、その横に雨豆裸が静かに鞆を置いた。

「ご苦労。私はしばらくこの子をモニターさせてもらいます。後は自由にしてください。ここにいるなり外で自分の用事を済ませるなり好きにしてくださいです」

二人に言い終わると徒具呂は白衣を身に付けサングラスからゴーグルに付け替えた。

そして、実芦の頭部にセンサー装置の付いたヘッドキャップを静かに取り付ける。

それと同時に自動起動の各機材のモニターがいつせいに瞬き始めた。ものすごい速さで画面が切り替わりすべてをデータ化していく中時折、

徒具呂がセンサーの感度を調整しつつ様子を見守る。

部屋の奥の机に座りその様子を見守りながら、

雨豆裸は自分の荷物から化粧品を机の上に並べ始めた。

爪の手入れを始めるつもりだ。

そんな様子を徒具呂は指してとがめる様子もなくそのまま実芦の観察をしている。

キャップ帽の男は無言で部屋を出て行った。

結果が出るまでは何も指示がないのはいつものことなので、

自分のねぐらに戻っていったのだ。

観察は少なくともまる一日はかかるだろう事も解っていたから。

しばらくすると、実芦の意識が戻り始めた。

自分の置かれている事態を確認するようにまぶたが静かに開かれ回りの様子を見ている。

頭にかぶせられたヘッドキャップにより首は自由に動かせないし手足は寝台の柵に固定されていた。

身動きをし始めた実芦に気がつくると徒具呂はそばに歩き寄りそつとささやく

「はじめまして。私はこの研究施設の徒具呂といます。しばらくあなたを調べさせてもらいますが、抵抗はしないでください。何も悪いようにはしませんから」

言い終わると実芦が抵抗をしないことを確認してまたモニターの調整を始めた。

一通り検査を完了すると今度はデータの分析をする。

ここからは被験者は関係ない。

今までのデータとの比較により結果がわかる仕組みだ。

徒具呂は目で雨豆裸に合図した。雨豆裸が静かに実芦に近付き、目を合わせた。

実芦は一瞬たじろいだがその派手さとは裏腹に化粧の顔の瞳にはまだあどけなさがあった。

もしかして自分と同じかそれより年下かもしれない。

「いま、これをとってあげるからね。静かにしてよ」
そつと実芦のヘッドキャップをとり、手足の枷もはずしていく雨豆裸だった。

少しずつ自由になる身体と、

雨豆裸のそれぞれのしぐさに意外な優しさを感じて実芦の緊張は消えていた。

「実芦、だよね。ミロって呼んでもいいかな。高校生だよね。学校ってどんな感じ？よかったら教えてくれない」

意外な物言いに、実芦は一瞬とまどった。だが悪気はないと感じたのですぐに答えた。

「いいところです。」

みんなそれぞれに考え、おしゃべりをして、笑ったり、励ましたり、走ったり、転んだり？とかでとつてもにぎやかです」

楽しそうに話を始めた実芦に、雨豆裸は引き込まれ始めた。

実芦は寝台に腰をかけるような姿勢になり、

雨豆裸はその隣に軽く飛び乗って同じ姿勢で座った。

そして実芦の顔を覗き込むように話す。

「うん、うん、それで、具体的にどんなことするの」

「えーと、たとえば、」

毎日のなんでもないことを並べているだけなのに、

雨豆裸は目を輝かせて実芦を質問攻めにした。

雨豆裸はとても楽しそうだった。そんなやり取りがしばらく続いた。

「へえ、そうなんだ。今まで知らなかったよ。」

そんなに楽しいなら行ってみたいけど、多分無理だよな」

一通り話を聞いていた雨豆裸の笑顔が翳った。何かさびしそうでもあった。

そのとき会話を遮る様に、徒具呂がしゃべり始めた。雨豆裸に命令する。

「もう、いいでしょう。さあいつもの機械を用意してください」

雨豆裸は一瞬戸惑うような視線を実芦に向けた。

「何？どうしたの」

実芦の問いかけに、雨豆裸は悲しそうな目で答えると、首を激しく左右に振った。

「徒具呂、今回は無しにしてくれないか、いや、いやだ。絶対にしたくない」

雨豆裸は視線を合わせないように下をむきながら思いつめたように言った。

「何を言うのですか。これは我々を守るために必要な事なのです。

さあ、準備をしてください、雨豆裸！」

徒具呂の声が大きく部屋に響くと雨豆裸は身をすくめた。

とんでもないことを言ってしまったと感じ、

自分でもいっただい何をしようとしているのかと思うと身体が震えはじめていた。

そんな雨豆裸を隣から肩を抱き寄せるように実芦がささやいた。

「何も気にしなくてもいいよ。」

あの人の言う通りにしてかまわないから、ね、雨豆裸ちゃん」

雨豆裸は信じられない、といった表情だった。

なんでこんなときにそんなに落ち着いていられるんだ。

しかも、自分の事を優しく名前まで呼んでくれた。

こんなことは初めてだし、なにかとても暖かい物が身体の中に広がっていく。

雨豆裸の気持ちは決まった。

この子をいつものように出来ない。いや、してはいけない、と。

「やっぱり、出来ない。そんな事この子にさせない」

雨豆裸は必死だった。後のことは考えられなかった。

あの機械は記憶を操作してこれまでの誘拐から部屋のこと、

実芦の中の雨豆裸と話した時間まで消されてしまうのだ。

そのことがなぜか雨豆裸にはとても大事な時間を奪われるような気

持ちになり、

拒絶反応になったのだ。

「まったく、役に立たない子だ。退きなさい、私が直接やります」

徒具呂は正面に立ちほだかる雨豆裸を力づくで押しやり、実芦の手を握った。

それはその直後に起こった。

徒具呂は一瞬痙攣をしたような動きを見せたかと思うと、

そのままその場に立ち尽くし硬直してしまったのだ。

その瞳は焦点を失い、遙か彼方を見ている。

まるで魂が抜け出てしまった肉体がそこに残ってしまったかのように。

そして実芦の表情は険しいものになり、

目は大きく開かれその瞳は強くすべてを見通すように徒具呂を見据えていた。

徒具呂は落ちていた。深く静かな水の中を果てしなく。

そこには時間の流れも深い呼吸の音も存在しない。

それは、暗い記憶の海の中を深く深く降りていくかの様だった。

やがて何処からともなく明かりが差し込んで、

周りが見えてくると同時に、ぼんやりと人影のようなものが徒具呂の目の前に現れた。

そしてはつきり見えてきたのは、明るい部屋の中で楽しそうに話し合う男女の姿だ。

一人が振り向きながら声をかけてきた。にこやかに話しながら抱き上げられた。

徒具呂は少年になっていた。

身体を軽く揺する様にあやし、もう一人がほほを指でつつきながら同じように話しかけてくる。

古い記憶の断片は、自らの両親の記憶であることを徒具呂は感じていた。

とても満ち足りていた。なにも怖くはない。希望と愛が彼らを包み込んでいた。

永遠に存在している。と思われたとき、
光の渦が両親を包みさらに明るく輝きだすと深い闇の手がその光ごと両親を引き裂いた。

大きな悲鳴の様な音が渦巻き、あちこちから発せられた悲鳴が甲高く共鳴していた。

暗い闇の中で徒具呂は泣き叫んでいた。もう二度と取り戻せない時の中で。

雨豆裸は立ち尽くしていた。徒具呂の様子がおかしい。

実芦に触れた途端、言葉が途切れ遠くを見つめたまま硬直している。ほんの数秒だったが、何か時間が止まっていたかのような感覚になっていた。

その緊張が徒具呂の深い呼吸の後、消えた。

徒具呂はその場にしゃがみ込んでしまった。

そして頭を抱えながら自分の記憶と戦っているようだ。

実芦は寝台に座ったまま静かに目を閉じていた。

徒具呂が叫ぶ

「みんな、出て行ってくれ。今すぐ」

雨豆裸はその言葉に即座に反応し、実芦に声を掛けて意識を確認した。

「実芦、大丈夫？」

「え、ええ。平気」

実芦はすでに徒具呂に触れる前に戻っていた。

それを確認すると、雨豆裸は実芦を抱きかかえるように寝台から降りし、

靴を履くように言った。

そして実芦の鞆をすばやく取り上げて入ってきた壁の方に二人で向

かった。

壁は雨豆裸が近づくと消えて、フロアへの出口になる。

二人はそこをフロアに向かって出て行った。そして出口は壁に戻った。

徒具呂はじつとしゃがんだままで、今の出来事を理解しようとしていた。

両親はあの時どうしていたのかと。

記憶の糸を遙かな過去より辿ってみるが、何に結び着くのかまったく解らずに居た。

中林はグレーのセダンの足取りを追って、ある町の大規模駐車場に来ていた。

周辺にはアパートや宿泊施設が多数あり、この界隈に宿泊しているものは、

まずこの駐車場を利用するはずだ。

そう踏んだ中林は持ち前の勘でここに来たのだ。

駐車場の空車スペースに車を止めてしばらく車両を観察してみることにした。

調べると何台か特徴に当てはまる車があったが、

その中でほとんど車内が確認できないスモークフィルムを張られた車両があった。

その車をしばらく“張る”ことにした。

何人が駐車場に出入りする人影があり車も何台か出入りがあったが、その車の持ち主らしき人物はいまだ現れない。

まあ、張り込みなんてものはじっくり構えていかないと意味がないからなあ、

などと自分を励ましながら、さめた缶コーヒーの残りをすすった。

座席を倒し背筋を伸ばしてストレッチを始めてみるが、

そのとき駐車場を取り囲む道路の向こう側から人影が急ぎ足でやってきた。

青い作業着の上下に長髪、そして同じ青いキャップ帽。

その表情は帽子で見えないが、かなり身体はがっしりしている。

中林は座席を元に戻しいつでも車を出せるように身構えると、その男は中林が目を付けた車に乗り込み、エンジンを掛けた。

「よし！待ってました」

中林はささやいた。

即座にグレーのセダンは走り出したので中林も付かず離れずその後を追った。

しばらく走ると、高層ビルの立ち並ぶ場所に着き、

そして路地を曲がるとビルの地下駐車場に入ってしまった。

中林はビルの駐車場入り口を確認すると自分は近くの民間駐車場に車を乗り入れ、

歩いて再度グレーのセダンの入った駐車場に戻ってきた。

しばらく様子を伺い中に入って見ると、

そこはビルの床面積いっぱいフロアが何層にもなっているかなり深い駐車場であった。

一階一階フロアを確認してグレーのセダンが止まっていなかったか確認して回るが、

目的の車は見当たらないし、結局そのまま最下階まで来てしまった。何かおかしい。

「車が消える訳がないだろう」

中林はつぶやいた。

今まで見たフロアではエレベーターと階段室への出入り口があるだけ、

車両が出入りできるのは入ってきた通路だけのはずだ。

しかも最下階は以上に狭く、車は一台も止まっていけない。

一番奥まで来て中林は床のタイヤの跡に気づいた。

頻繁に車の出入りした後がはつきり解るのだが、

タイヤ痕は行き止まりの壁に向かっていて前で止まった形跡もないし、

まるで壁に吸い込まれたように壁に当たって消えている。
何度も壁を叩いてみたり、
継ぎ目がないか確認したがこの建物を覆っている壁と何ら変わりがない。

むしろほかの壁よりもしつかりしている感じで、
しばらく壁を触りながら見落としがないかじっくり調べていると、
かすかに振動を感じた。

その瞬間壁の向こうからエンジン音が近づいてきている。
「やばい！」

中林は、壁から離れると柱の影に身を潜めた。
その直後ヘッドライトが壁の中から現れた、
というより車が飛び出してくる瞬間壁が消えたのだ。
車が一台通れる大きさに開き、

黒のセダンがすばやくフロアを通りぬけて出口に向かっていった。
振り向いて見るとその通路はまた壁に戻っていた。
いそいで壁に体当たりをしたが、むなしくはじき返された。
「あう、いつてえ、あちちち、くそ！」

痛む肩を押さえながら思わず叫んでいた。
何も考えずに壁に向って体当たりをするとは。

後から考えるとばかな事をしてるとつくづく自分が情けなくなった。
自分が理解できないことは根性で何とかなるんじゃないか、
などと学生の運動部気分がまだ抜けずにいることを含めて、
もう年なんだから考え直せ、と言いつ聞かせた。

これは理系の人間でないと理解できそうもない現象だな。
そうだ、あいつらならこの壁のことがわかるかも知れない。

中林は携帯を取り出した。しかし圏外だ。これじゃ仕方ない。
フロアを出口に向かい登り始めて、
やっと通話状態になったのはビルの外に出たときだった。

「やあ、おれだよ、中林だ。今いいかな」

「あ、先輩。いいですよ、ちょうど外回りから戻ったところです」

通話の相手は御手洗だ、相変わらず、中林に対して明るい態度だ。
「わるいなあ、ちょっと調べてもらいたいことがあるんで、頼むよ」
「はい、なにか？」

「確か、お前の同期に科学課に行った奴がいたな。あいつ今どうしてる？」

「俊、結城俊ですか。」

今は総合科学庁に移ってなにか研究していますよ。

たまに会って話を聞くのですが、俺にはちんぷんかんぷんで、まいつちやいますよ、でその俊がなにか役に立つんですか？」

「おお、そうそう、そういう奴がほしかったんだ。」

今まさに捜査の行き止まりでなあ、はははは、」

中林はあの壁と行き止まりを掛けた自分を思わず笑ってしまった。

「なんすかそれって、先輩大丈夫ですか？」

「な、なに言ってるやがる。これはマジ！マジなんだよ。」

「わ、解りましたよ。で、どこで打ち合わせします」

「そうだな、あの店知ってるか、シヨッピングモールのセンター街の海洋って店」

「はい、大体解ります」

「で、そこに今夜でどうだい」

「了解です。俊はきっちり定時で上がれるいいご身分だから、大丈夫でしょう」

皮肉たっぷりに御手洗は言った。

「じゃ、宜しく」

よし、あとは若い奴らの知恵を借りて実行あるのみ、と中林は鼻息を荒くした。

そして携帯を背広の胸ポケットにしまつと自分の車のところまでもどり、

素早く運転席に乗り込むと、その店の方角に車を走らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2553y/>

HARUNE

2011年11月6日04時08分発行